

平成17年度  
**外部評価報告書**

平成18年8月  
鹿児島工業高等専門学校



## まえがき

『中小企業白書』（経済産業省中小企業庁編）の統計から、日本の製造業のうち中小企業が占める割合をみると、中小企業の事業所数と従業員数は、それぞれ全体の99%、72%であります（中小企業とは従業員数300人以下または資本金3億円以下）。日本の隆盛と生き残りは「ものづくり」技術力に負うところ甚大であり、それを大部分支えているのは中小企業であることから、中小企業は日本の経済活動のダイナミズムの源泉であり、その振興こそは経済新生の鍵になると認識されています。

本校卒業生の社会における活躍振りの一つの尺度として、企業（中小企業）のオーナーとして活躍している卒業生の割合（第1回から15回卒業生数の8.2%）が極めて高いということがあります。この割合は大学卒よりはるかに大きく、他高専に比べてもかなり高いものであります。

平成18年3月に、『明日の日本を支える“元気なモノ作り中小企業300社”』（経済産業省中小企業庁編）が発表されました。全国300社の元気な中小企業のなかで、鹿児島県から3社（瀧上ミクロ、藤田ワークス、エルム）が選ばれていますが、この3社のすべて会社において、それぞれ2～4名の鹿児島高専卒社員がリーダー格として活躍しています。

これらのことを含めて、本校は、「実践的かつ専門的な知識及び技術を有する創造的人材を育成すること」という国立高専機構の設置目的に沿った教育が見事に実を結んでおり、日本の国である「科学技術創造立国」のために少なからず貢献していると自負しております。

平成15年度に本校の教育プログラムが世界的に通用するJABEE（日本技術者教育認定機構）基準に適合していることが認定され、昨年度行われた中間審査の結果、平成19年度までの認定が確定しました。次の審査時まで、さらに実力を高めた学生を世に輩出するために、学生と協働して教育プログラムの継続的な改善をする必要であります。

このたび、準学士過程（本科）および学士過程（専攻科）を通して、平成13年度～17年度間の本校の管理・運営、教育、研究、産学官連携・地域連携の状況に対して、自己点検を実施しました。この自己点検の結果に対しまして、県下の各界（教育機関、研究機関、産業界、報道機関、弁護士界）リーダーの有識者の皆様、赤坂裕様、吉永富城夫様、迫田昌様、谷口功二様、宮下正昭様、吉原不二枝様、相良正典様、笹川理子様には、外部評価委員として評価をお願いしましたところ、大変貴重なご意見と提言を頂きました。心から厚くお礼申し上げます。頂きましたご意見と提言に対しまして現状分析を行い、今後の対応策について慎重審議を行いましたのでその結果をご報告します。

ご意見と提言を指針として、これからも引き続き改善を図っていく所存でありますので、今後とも何卒ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

平成18年8月

鹿児島工業高等専門学校長

前 田 滋



# 目 次

## まえがき

1．外部評価委員会委員名簿 .....	1
2．外部評価委員会出席者名簿 .....	2
3．外部評価委員会日程表 .....	3
4．外部評価委員会規則 .....	4
5．外部評価委員会議事録 .....	5
6．外部評価委員からの提言に対する本校の今後の対応等 .....	4 0
7．学校概要説明資料 .....	4 4

1 . 外部評価委員会委員名簿

役 職 名	氏 名
第1号委員 鹿児島大学地域共同研究センター長 鹿児島大学工学部建築学科 教授	赤 坂 裕
第2号委員 霧島市教育部長	吉 永 冨城夫
第3号委員 財団法人かごしま産業支援センター 専務理事	迫 田 昌
第4号委員 株式会社トヨタ車体研究所 取締役社長 錦江湾テクノパーククラブ 会長	谷 口 功 二
第5号委員 株式会社南日本新聞社 国分支社長	宮 下 正 昭
第6号委員 有限会社環境経済研究所 代表取締役 鹿児島県建設技術センター評議委員	吉 原 不二枝
第6号委員 株式会社相良製作所 代表取締役	相 良 正 典
第6号委員 笹川法律事務所 弁護士	笹 川 理 子

## 2. 外部評価委員会出席者名簿

### 外部評価委員会委員出席者

役 職 名	氏 名
鹿児島大学地域共同研究センター長 鹿児島大学工学部建築学科 教授	赤 坂 裕
霧島市教育部長	吉 永 富城夫
財団法人かごしま産業支援センター 専務理事	迫 田 昌
株式会社トヨタ車体研究所 取締役社長 錦江湾テクノパーククラブ 会長	谷 口 功 二
株式会社南日本新聞社 国分支社長	宮 下 正 昭
有限会社環境経済研究所 代表取締役 鹿児島県建設技術センター評議委員	吉 原 不二枝
株式会社相良製作所 代表取締役	相 良 正 典
笹川法律事務所 弁護士	笹 川 理 子

### 鹿児島工業高等専門学校出席者

役 職 名	氏 名
校 長	前 田 滋
教務主事 (教務委員会委員長)	河 野 良 弘
学生主事 (学生委員会委員長)	西 留 清
寮務主事 (寮務委員会委員長)	赤 澤 正 治
研究主事 (研究促進委員会委員長)	大 竹 孝 明
地域共同テクノセンター長 (地域共同テクノ運営委員会委員長)	大 竹 孝 明
専攻科長 (専攻科委員会委員長)	須 田 隆 夫
一般教育科文系科長 特命統括官(留学生担当) (外国人留学生専門委員会委員長)	嵯峨原 昭 次
一般教育科理系科長	藤 崎 恒 晏
機械工学科長	池 田 英 幸
電気電子工学科長	本 部 光 幸
電子制御工学科長	坪 井 克 剛
情報工学科長	加 治 佐 清 光
土木工学科長	平 田 登 基 男
図書館長 (図書館運営委員会委員長)	松 本 裕 司
情報教育システムセンター長 (情報教育システム委員会委員長)	植 村 眞 一 郎
特命統括官(FD担当) (FD委員会委員長)	宮 田 千 加 良
特命統括官(JABEE担当) (教育プログラム改善委員会委員長)	山 田 一 二
特命統括官(ロボコン担当)	内 谷 保
事務部長	倉 狩 不 二 男
庶務課長	磯 田 信 一
会計課長	大 城 清 隆
学生課長	嶋 田 勝 憲
技術室長	松 元 悦 郎

### 3 . 外部評価委員会日程表

日 時 平成18年2月 7日(火)  
13:30 ~ 17:15

場 所 鹿児島工業高等専門学校 管理棟2階 大会議室

#### 会次第

- (1) 開 会
- (2) 校長あいさつ
- (3) 委員及び本校出席者の紹介
- (4) 委員長選出
- (5) 学校概要説明及び各主事, 各委員長等説明
- (6) 意見交換
- (7) 閉 会

#### 資料

- ・有識者からの評価・提言(平成15年3月実施)の達成状況及び ..... 資料1  
 今後の課題
- ・有識者からの評価・提言(平成15年3月実施)の達成状況及び ..... 資料1 - 1  
 今後の課題 (参考資料)
- ・主な委員会・学科等における3年間(平成15~17年度)の ..... 資料2  
 主な取り組み状況
- ・主な委員会・学科等における3年間(平成15~17年度)の ..... 資料3  
 主な取り組み状況 (参考資料)
- ・高専関連記事(平成15年2月~平成18年1月/掲載日降順) ..... 資料4
- ・平成14年度 外部評価結果報告
- ・自己点検・評価報告書 第4号(平成13~15年度)



#### 4 . 外部評価委員会規則

### 鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会規則

#### (設置)

第1条 鹿児島工業高等専門学校(以下「本校」という。)に外部評価委員会(以下「委員会」という。)を置く。

#### (目的)

第2条 委員会は、本校が行った自己点検・評価結果等について検証を行い、本校の教育・研究等の改善に資することを目的とする。

#### (組織)

第3条 委員会は、人格識見が高く、かつ、本校の発展に理解ある次の各号に掲げる学外者の中から、校長が委嘱した若干名の委員をもって組織する。

- (1) 大学、高等専門学校等の高等教育機関の教員及び経験者等
- (2) 本校の所在する地域の教育関係者
- (3) 地方自治体等研究機関の研究者等
- (4) 産業界の有識者
- (5) 報道機関の有識者
- (6) その他校長が必要と認める者

#### (委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、委員の互選により選出する。  
2 委員長は委員会を召集し、その議長となる。

#### (任期)

第5条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

#### (報告書と公開)

第6条 外部評価を行ったときは、報告書を作成し、公開するものとする。

#### (運営)

第7条 委員会の運営については自己点検・評価委員会が行う。

#### 附 則

- 1 この規則は、平成16年5月21日から施行する。
- 2 この規則施行後、最初に第3条に規定する委員となる者の任期は、第5条の規定にかかわらず、平成18年3月31日までとする。
- 3 鹿児島工業高等専門学校と有識者との懇談会要項は、廃止する。

## 5 . 外部評価委員会議事録

【庶務課長】 それでは、定刻となりましたので、ただいまから、平成17年度鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会を開催いたします。

### 校長あいさつ

【庶務課長】 初めに、校長の前田から挨拶を申し上げます。

よろしくお願いたします。

【校長】 本日は、年度末の大変お忙しい時期に平成17年度鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会にご出席いただきまして誠にありがとうございます。厚くお礼申し上げます。

国立高等専門学校という高等教育機関は44年前、日本の高度成長期に社会の産業界からの強い要望がありまして、実験・実習を重視した教育を行い、実践的で創造的な技術者を育成するという使命を持って設立されました。

卒業生を出してほぼ40年になりますが、ありがたいことに、現在に至るまで高専は日本の産業界を支える基盤として非常に大きな使命を果たしてきたと評価されていますし、今後も期待されているところであります。

平成11年9月に改正されました高等専門学校設置基準によりますと、「高等専門学校は、教育の水準の向上を図り、当該高等専門学校の目的及び社会的使命を達成するため、当該高等専門学校における教育研究活動の状況について、自ら点検及び評価を行い、その結果を公表すること。」ということに付け加えまして、「点検及び評価の結果について、当該高等専門学校の職員以外の者による検証を行うよう努めなければならない。」という努力義務が定められました。

本日は、この新しい高等専門学校設置基準の趣旨に基づいて、本校内部で行いました自己点検及び評価の結果を検証していただきたく、本校職員以外の各界の第一線で大活躍中の有識者の皆様にご足労をお願いしたわけでございます。

本日は、3時間という短い時間ではありますけれど

も、委員の先生方から、鹿児島高専の将来のため鋭く厳しい目で評価をいただきますようお願い申し上げます。

本校内部での点検・評価と、それに対して客観的な検証・提言をいただくための学外有識者との懇談会は、先ほど申しました新設置基準が制定される以前の平成8年からスタートしておりまして、それ以降1～2年ごとに開催し、今回は第7回目ということになります。

前回は、「有識者との懇談会」という名称で平成15年3月に開催しておりまして、今回は「外部評価委員会」と名称を改めまして新しくスタートしました。

前回の有識者からの評価及び提言された内容は、お手元のもえぎ色の冊子、「平成14年度外部評価結果報告」にまとめられていまして、その冊子の33ページに「有識者からの提言に対する本校の今後の対応等」というところで、委員の皆様方からの提言を22項目にまとめて一覧表に整理しております。本校の発展のために大変貴重なご意見をいただいたことに感謝し、全校を挙げて改善に努めてまいりました。

本日は、前回の会議でちょうだいいたしました22項目の評価及び提言について、本校が取り組みました結果の達成状況と今後の課題をお手元の配付資料1に「有識者からの評価・提言の達成状況及び今後の課題」ということでまとめさせていただきましたので、この後、最初にご報告いたします。

本来ならば、今回の外部評価委員会では、前回からの継続としての平成13年度から15年度の3年間の「自己点検・評価報告書」、このブルー色の厚い冊子がございますが、この報告書第4号に対して評価していただくのが本筋でございますが、ちょっと時間がたちまして、平成15年度にJABEEという日本技術者教育認定機構の実地審査も受けましたし、また平成16年度には本校が法人化になりました。平成17年度にはJABEEの中間実地審査などがありまして、本校の教育環境は極めて急速に変化しておりますので、平成15年度以降の取り組みにつきましても評価・提言をいただければ幸いに存じます。

平成15年度以降の取り組みにつきましては、資料2に「主な委員会・学科等における3年間の主な取り組み状況」ということでまとめてございますので、後ほど説明させていただきます。

本日の外部評価委員会のために、委員の皆様にも前もって送付させていただきました資料及び本日ご説明いたします資料は甚だ大量、多岐にわたっておりまして、評価委員の先生方には大変頭を悩まし、ご面倒をおかけいたしました。

そこで、本日は、お手元の「自己点検・評価報告書第4号」のブルーの冊子をベースに、そして資料1の「有識者からの評価・提言の達成状況及び今後の課題」と、資料2の「主な委員会・学科等における3年間(平成15~17年度)の主な取り組み状況」の3誌に基づいて、どのようなささいなことでも問題点をご指摘いただければありがたいと存じます。

もし、的を絞るとしますと、本校としましては、まずは有能な入学生の確保、すなわち入り口の問題、そして入学後、卒業までに学生が十分な社会常識と十分な創造的・実践的技術を身につけているかという卒業時の実力の獲得、いわゆる出口の問題のために学校がどのような効果的な取り組みをしているかと、そういう視点・観点で評価・提言をいただければ幸甚に存じます。

本校としましては、先生方からいただくご指摘、評価・提言を一大指針、努力目標とさせていただき、本校教職員が一丸となって学校改善のために全力で取り組みたいと考えております。どうか本日はよろしくご審議のほどお願い申し上げます。

## 委員の紹介

【庶務課長】引き続きまして、外部評価委員の紹介をさせていただきます。

私の方からお1人ずつお名前をお呼びいたしますので、ご起立の上ご紹介をお願いいたします。

なお、外部評価委員会規則第3条における委員順にお名前をお呼びいたします。

初めに、鹿児島大学工学部教授兼同大学地域共同研究センター長、赤坂 裕様でございます。

【赤坂委員】赤坂と申します。ただいまご紹介いた

だきましたように工学部の建築にあります。大学の産学官連携を推進する機関であります地域共同研究センターのセンター長を兼任しております。

よろしく申し上げます。

【庶務課長】次に、霧島市教育部長、吉永 富城様でございます。

【吉永委員】紹介いただきました霧島市教育部長の吉永でございます。

私は、去る11月までは隼人町の生涯学習課長を務めさせていただいておりました。その中で高専の諸先生方と交流いたしまして、子供たちのためにいろいろな講座等を準備していただきました。その他については、私、高専のことについては余り存じておりません。ただ、これからやっぱり高専が、より地域に必要な組織であって欲しいという思いで、前田先生から依頼がありましたこの仕事をお引き受けいたしました。

よろしく願いいたします。

【庶務課長】次に、財団法人かごしま産業支援センター専務理事、迫田 昌様でございます。

【迫田委員】ご紹介いただきました迫田でございます。

今、地方公共団体、国を挙げてもの作りの見直しの取り組みを行っています。

私の方は県下の中小企業さんからの相談あるいは研究開発等々について支援している立場にございまして、当センター、地域共同研究センターの赤坂先生などと一緒になって、県の中小企業さん方をいろんな形でサポートする立場にございます。

そういう意味では、かねていろいろと高専の皆さん方にはお世話になっておりますし、また今後、今、申し上げたような観点から一緒に取り組ませていただければと思います。

よろしく願いいたします。

【庶務課長】次に、株式会社トヨタ車体研究所取締役社長、谷口 功二様でございます。

【谷口委員】研究所の谷口です。日頃お世話になっております。

錦江湾テクノパーククラブの会長を2年前からやらせていただいております。地元の企業との関わりを、高専さんのシーズを地元企業との関わりにうまく使っ

ていけないかなということで努力しております。まだまだ力不足ですので、なかなか厳しいところがありますけれども、少しでもお役に立てればということでやらせていただいております。

今日は評価委員の委員なんて大変な仕事を受けたが、少しでも率直な意見ができればと思っておりません。

よろしく申し上げます。

【庶務課長】次に、株式会社南日本新聞社国分支社長、宮下 正昭様でございます。

【宮下委員】皆さんこんにちは。南日本新聞の宮下と申します。国分支社に昨年4月に参りました。

正直言います私、大学は文系で理系のことはほとんど分かりません。高専というのも名前は知っていて、何となくこんな学校だろうなという程度のもので、今回いただいた資料を見ながら、すごい学校だなと初めて知ることが多くてびっくりしているところです。今日はまたさらに勉強させていただきます。それで、私の立場で言うことがあったらご意見させていただきますと思います。

よろしく申し上げます。

【庶務課長】次に、有限会社環境経済研究所代表取締役、吉原 不二様でございます。

【吉原委員】平成14年度の資料で、外部評価・結果報告を見ましてがっかりいたしました。先ほど南日本新聞の方が文系だとおっしゃったんですが、私は家政科の出身で、一応家政科は理系となっているんですね。だけれども、理系のことは全く分からないで、日本語は少し分かるかなと思っていて、ここ私が言ったところをもう一回、あのときは限られた時間の中で、まあまあ自分ではまとまって言えたと自己満足していたら、何という日本語だろうと思ってがっかりいたしました。もうちょっとまして、しっかりした日本語を使って正しい評価をできたらと思っています。

よろしく申し上げます。

【庶務課長】次に、株式会社相良製作所代表取締役、相良 正典様でございます。

【相良委員】相良製作所の相良です。

私は、平成14年度の結果にもありますけれども、その前はそちら側に座っていて、こっちに来ましたので

大分上がってしゃべったとみえて、この内容を見ましたら本当にしゃべりが下手くそだなと、もうそのままきちんと記録してあるんだけど、何を言っているか分からないような自分の言葉を見て、言わんとするところがなかなか、これが私の5年間の高専生活の結果なのかと思って、外部評価というよりもとても恥ずかしい思いでございました。

私は卒業してから自分のこの会社に入りました。現在、製茶の機械と、それから今、隼人に工場がありますけれども、鋼材加工の仕事をしております。隼人に工場を造ったのも高専あったのことで、国分に出すのかあちこち調べましたけれども、結局は縁があって、この今の同じ団地の中に工場を造って仕事をしております。一番身近に、高専の近くにいるという点では、一番高専を愛した男かなあと自分では自負しているんですけども、学校から愛されたかどうかは分かりません。ただ、今日の評価の中で自分の意見がプラスになればと思って参りました。

よろしく申し上げます。

【庶務課長】最後に、笹川法律事務所、笹川 理子様でございます。

【笹川委員】皆さんこんにちは。弁護士の笹川でございます。

本日は委員ということでこちらに座っているわけですが、先ほどから理系、文系という話が出ていますが、私、職業を見ていただければお分かりのとおりもう根っからの文系でして、まして高専に今まで関わりを持ったことがありませんでしたので、今回初めて資料を見させていただいて、少しまたイメージが掴めてきたかなといったところです。ですので、あまり知識もありませんし、的確なことを申し上げられるのかも分かりません。

また、大変失礼なんですけれども、途中でちょっと中座をさせていただく予定でありますので、いろいろ失礼なことはあるかと思っておりますけれども、できる限りで精いっぱいさせていただきますので、よろしく申し上げます。

## 出席者の紹介

【庶務課長】 ありがとうございます。

続きまして、本校出席者の紹介をいたします。

初めに、前田校長でございます。

【校長】 平成12年度から本校の校長をしております前田と申します。どうかよろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、河野副校長兼教務主事でございます。

【副校長兼教務主事】 今年度から教務主事をやっております河野です。今日はよろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、西留学生主事でございます。

【学生主事】 同じく今年度から学生主事をしております西留でございます。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、赤澤寮務主事でございます。

【寮務主事】 こんにちは。本年度から寮務主事をしております赤澤です。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、大竹研究主事兼地域共同テクノセンター長でございます。

【研究主事兼地域共同テクノセンター長】 皆様こんにちは。同じく今年度より研究主事、それから兼務という形で地域共同テクノセンター長を担当しております大竹でございます。今日はよろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、須田専攻科長でございます。

【専攻科長】 同じく今年度から専攻科長を務めております須田でございます。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、嵯峨原一般教育科文系科長兼留学生担当特命統括官でございます。

【一般教育科文系科長兼留学生担当特命統括官】 こんにちは。一般教育科文系科長の嵯峨原です。私、留学生統括官という留学生をサポートする仕事も兼務しております。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、藤崎一般教育科理系科長でございます。

【一般教育科理系科長】 一般教育科理系科長の藤崎でございます。今日はよろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、池田機械工学科長でございます。

【機械工学科長】 今年度から機械工学科の学科長をしております池田と申します。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、本部電気電子工学科長でございます。

【電気電子工学科長】 昨年度から電気電子工学科長を務めております本部と申します。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、坪井電子制御工学科長でございます。

【電子制御工学科長】 坪井でございます。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、加治佐情報工学科長でございます。

【情報工学科長】 加治佐です。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、平田土木工学科長でございます。

【土木工学科長】 平田です。どうぞよろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、松本図書館長でございます。

【図書館長】 松本でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、植村情報教育システムセンター長でございます。

【情報教育システムセンター長】 植村でございます。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、宮田FD担当特命統括官でございます。

【FD担当特命統括官】 宮田です。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、山田JABEE担当特命統括官でございます。

【JABEE担当特命統括官】 山田です。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、内谷ロボコン担当特命統括官でございます。

【ロボコン担当特命統括官】 内谷です。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、事務部の方に参ります。倉狩事務部長でございます。

【事務部長】 昨年の4月からこちらにお世話になっております倉狩と申します。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 大城会計課長でございます。

【会計課長】 大城でございます。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、嶋田学生課長でございます。

【学生課長】 嶋田です。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、松元技術室長でございます。

【技術室長】 松元でございます。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 私は、委員長選出までの間、司会進行を務めさせていただきます庶務課長の磯田と申します。よろしくお願いいたします。

### 資料確認及び会次第説明

【庶務課長】 先ほどちょっと校長の方からもありましたけれども、資料確認をさせていただきたいと思えます。

お手元のお持ちいただいている資料をもう一度見ていただいでよろしいでしょうか。

「外部評価委員会」という資料ナンバーの振ってないレジユメがございます。その次に、ナンバーの振った資料1～4、それと冊子としまして「平成14年度外部評価結果報告」、分厚い「自己点検・評価報告書第4号」というのがございます。

また、本日は、追加資料としまして1 - 2というのを配付いたしております。

もしお持ちになっておられない場合はお申し出いただきたいと思えます。

よろしいでしょうか。

では 本日の日程について簡単にご説明いたします。

一番最初のレジユメの3枚目あたりの1ページ目をご覧くださいと思えます。

3番の会次第のところですが、これから委員長選出を行います。その後、本校出席者による学校概要説明及び各主事、各委員長等による説明を行います。

約1時間の説明の後、15時になりましたら約10分の休憩を挟みまして、15時10分から意見交換ということで、外部評価委員の提言・意見を賜り、その質疑応答をいたしまして、16時30分には予定どおり終了させていただきますので、時間調整のほどよろしくお願いいたします。

### 委員長選出

【庶務課長】 引き続きまして、委員長選出に入らせていただきたいと思います。

外部評価委員会規則第4条により、「委員会に委員長を置き、委員の互選により選出する。」とあります。この規定に基づき、委員長選出を行いたいと思えますが、互選ということになっております。

失礼ですが、どなたか委員長を引き受けていただけの方はいらっしゃいませんか。

もし、いらっしゃらないようであれば、前々回、前回も委員として出席していただいた鹿児島大学の赤坂先生、いかがでしょうか。

【庶務課長】 もしよろしければよろしくお願いいたします。

【赤坂委員】 私ではよろしければお引き受けいたしません。

【庶務課長】 では、赤坂先生、委員長ということでよろしくお願いいたします。

【校長】 大変なお仕事をお引き受けいただきましてありがとうございました。

赤坂委員長、よろしくお願いいたします。

### 委員長あいさつ

【赤坂委員長】 それでは、委員長を務めさせていただきます。

私、これで7回目とお聞きしましたが、これまでほとんど全部出ているんじゃないかと思うんですね。

前回までは有識者懇談会ということで、その後、鹿児島工業高等専門学校法人化ということになりました。法人化後の第1回の、名前も「外部評価委員会」ということになりました。ということで委員の皆様、これから高専の方からいろんなご説明があると思えますけれども、その後、いろんなご意見を出していただきたいと思えます。よろしくお願いいたします。

### 学校概要説明

【委員長】 それでは、早速議題に移らせていただきますけれども、まず、学校の概要の説明、各主事、各委員長の方々にご説明していただきますが、磯田庶務

課長の司会進行により進めていただきたいと思います。  
よろしくをお願いします。

【庶務課長】 了解いたしました。

それでは、学校概要説明及び各主事、各委員長等の説明について、私の方で進めさせていただきます。

まず、学校概要説明につきまして、河野教務主事からお願いいたします。

【教務主事】 それでは、学校の概要につきましてこれから大体10分程度ご説明申し上げたいと思います。  
(パワーポイントによる説明)

これが本校の校舍関係であります。これが管理棟で、今皆様方がいらっしゃるところがここの部屋になります。こちらの方には専攻科と地域共同テクノセンター、あと各学科の校舍があります。敷地12万㎡で甲子園球場の約3倍という広さであります。

これが本校の学習・教育目標で、養成すべき人材像として以下の学習・教育目標を掲げております。

まず1番目に、人類の未来と自然との共存をデザインする技術者となること。2番目に、グローバルに活躍する技術者となること。3番目に、創造力豊かな開発型技術者となること。4番目に、相手の立場に立ってものを考える技術者となること。これらの4つの項目を教育目標として掲げております。

今年度から入学者の受け入れ方針(アドミッション・ポリシー)を決めております。

先ほど申し上げました「本校の学習・教育目標に共感し、この目標達成にふさわしい素質と能力のある人を受け入れます。特に次のような人を求めています。」ということで、ここに4項目あります。「論理的な思考ができる人。もの作りが好きな人。プレゼンテーション能力のある人。21世紀の世界を支える技術者として、大いに活躍したいという夢のある人」です。この4項目を掲げております。

高等専門学校(高専)、この制度は皆さんご存じかと思いますが、一応念のために申し上げます。

中学校を卒業しまして5年間の技術教育を行います。これを本科と本校では言っています、その上に2年の専攻科があります。5年生でいろんな選択をするわけですが、大学3年に編入学する学生、それから本校の

専攻科に入る学生、それから企業に就職していく学生、このような進路に分かれますが、現在では大学への編入学と専攻科に進学する人、これが大体4割でございます。あと6割が就職していくという状況になっております。それから専攻科に入って2年修了しますと、就職する学生と大学院に入学する学生で、進路が分かれます。

一方、本校も工業高校の卒業生を本校の4年生に編入学で受け入れています。

高等教育機関としましては、短大の場合準学士、大学の場合学士を授与されます、これと同じで本校の本科の卒業生は準学士、それから専攻科を出ますと学士を授与されます。

全国の高等専門学校の国立はすべて法人化されたわけですが、独立行政法人高専機構、これは工業系が50校、商船系が5校、計55校あります。それ以外に公立の工業系が5校、私立の工業系が3校、合計63校。日本に高専というのが63校あるということになります。

カリキュラムについては、5カ年一貫教育ということで、1年から5年に学年進行とともに一般科目の各教科は少なくなり、専門科目が多くなっていきます。

本科には機械工学科、電気電子工学科、電子制御工学科、情報工学科、土木工学科、5学科あります。各学科定員いずれも40名です。専攻科につきましては、機械・電子システム工学専攻が8名で、電気情報システム工学専攻が8名、土木工学科専攻が4名で、定員は20名です。

こちらに書いてありますが、現在の在籍している学生数になります。各学科5学年ありますので、200名が定員ですが、いずれも定員をオーバーしています。こちらの括弧が内数で、女子学生数ということになります。今、本校の本科でいいますと、1,034名の学生のうち118名が女性ということになります。

入学試験ですが、現在、学力試験と推薦入試、この2つの選抜を行っております。試験科目につきましては、5科目(英語、数学、国語、理科、社会)配点につきましては、数学が200点で、その他は100点、計600点満点となります。推薦入試につきましては、大体30%程度、各学科12名程度ということになります。推薦基準としては2つの項目があります。3年次の1学期及

び2学期の席次の平均が当該学年全体の上位10%以内に属する者。もう1つの推薦基準は、その上位15%以内で生徒会長経験者とか部活動等で優秀な成績を修めた者。このような推薦基準で推薦をお願いしております。なお、推薦選抜には作文、面接、工学適性検査を課しております。

これは入試統計です。今の1年生の入試です。機械工学科が一番志願倍率が高く2.5倍で、この順番になっており、土木工学科が0.9倍です。これは第1希望だけの志願倍率であります。本校は2学科を志願することができますので、第2希望を入れますと大体これは倍近くになります。

これは入学時の諸経費です。高専というのは非常に学費が安いといわれますが、入学料が84,600円、前期授業料が117,300円です。これは専攻科についても同じです。大学の場合は大体26万円ぐらいでしょうか。それから教科書代とかありまして、ここに制服代とあります。これは本年度から制服は廃止いたしました。自由服ということになっておりまして、女子学生でもこれを買う必要はないということになります。

授業料免除ですが、これは199名、大体学生の18%が授業料免除を受けているという状況です。それから奨学金をもらっている学生は227名です。全学生数の大体22%が何らかの形で奨学金を貸与されていることになります。

卒業後の進路ですが、平成17年3月に卒業した卒業生数が204名です。そのうち就職した者が105名(51%)、進学した者が83名、大体41%です。進学先は、こちらの方に書いてございまして、20名定員の専攻科に37名受け入れております。その他、鹿児島大学、九州工業大学、豊橋技科大、長岡技科大等へ編入しております。自営その他が16名ということになります。

これが、2005年ロボコン九州・沖縄地区大会で優勝しましたときの写真です。全国大会に出場しまして、ベスト4で技術賞をいただきました。

これは寮の風景です。これが寮の中でして、大体2人部屋ということになります。

それから、産学官連携・地域連携等関連の実績はここに挙げてございます。共同研究・受託研究が980万円。受託試験が約1500件、2300万円。奨学寄付金が420万円。

技術相談が50件。それから「鹿児島高専産学官連携推進室」を、鹿児島市の「ソフトプラザかごしま」内に設置しております。それから、谷口社長さんが会長をしていただいております錦江湾テクノパーククラブ。それから高専発ベンチャー企業である(有)隼人テクノを設立しております。

それから、隼人錦江スポーツクラブとかあるいは隼人町教育委員会と連携協力協定の締結。それから現在、高専等活用人材育成事業のFS調査を実施しているところがございます。

大体学校の概要といたしましては以上でございます。

### 評価・提言に対する説明

【庶務課長】 続きまして、各主事等による説明を行います。

まず、前回提言がございました項目に対する達成状況と資料1について、その後、各学科等の主な取り組み、資料2について説明願います。

外部評価委員の皆様におかれましては、ご質問等がございましたら、後半で行われます意見交換時に提言・意見と一緒にご質問をお願いしたいと存じます。

### 校長の説明

【庶務課長】 それでは、資料1の提言等に対する達成状況等につきまして、前田校長、よろしく願います。

【校長】 最初のご挨拶のときに申し上げました、もえぎ色の「平成14年度外部評価結果報告」の33ページから、前回の有識者との懇談会のときに提言いただきました22項目について、本校でその提言に基づいて取り組みました結果についてご説明申し上げます。

資料1をご覧ください。

資料1に、22項目に対してどのような取り組みをしたかということを示してございまして、その補助資料として資料1-2というのがございます。

まず、私の方から、提言1と2について説明させていただきます。

### 評価及び提言 No.1

提言1といえますのは、本校で定めています教育理念の2番目の文中に「また特別の事項について」とい



う言葉があります。それはお手元の資料1 - 2の1ページ、2ページをご覧くださいと思います。

2ページが旧来の「鹿児島高専の目的、理念等の相関」であります。真ん中の2段目に「鹿児島高専の教育理念」というのがございまして、その2番目のところに赤字で示した「教育内容を学術の進展に対応させるため、また、特別の事項について、必要な研究を行う。」この「特別な事項」を少し具体的に書いた方がよしいということがございまして改めましたのが、左の1ページの「新」というところの「鹿児島高専の教育理念」の2番目に「特別の事項について」というところを「実践的技術の発展のため」というふうに改めさせていただきます。

#### 評価及び提言 No. 2

提言2につきまして、委員の方から、「理念・目標等を達成するための委員会の機能が見えない。」ということがございまして、それについて審議したわけですが、資料1の表の提言2に、「準学士課程の理念・目標の達成を目指す教務委員会及び専攻科の理念・目標の達成を目指す専攻科委員会」教務委員会と専攻科委員会というものが連携を図るために、平成16年度に教育プログラム点検会議というのを設置いたしました。

それはお手元の資料1 - 2の3ページをご覧くださいと思いますが、「委員会等 提言2」というところで「委員会等組織図」がございまして、中ほどに網かけしております。「教務主事」の右側にあります4番目の「教育プログラム点検会議」というところで、本科の教務関係、専攻科の教育、そういうものを連携するための教育プログラム点検会議を設けまして、全体が機能するようにしたところであります。

以上、提言1と2に対しての達成状況の報告は終わります。

#### 教務主事の説明

【庶務課長】 次に、河野教務主事、よろしくお願いいたします。

#### 評価及び提言 No. 3

【教務主事】 3番目の教育目標から、提言3という項目がございます。資料1 - 2をご覧くださいと思います。

その5ページに、環境創造工学教育プログラム学習・教育目標のサブ目標と、本科(準学士課程)学習・教育目標のサブ目標があります。

本校の学習・教育目標は、4項目あります。この4項目の目標に対して、それぞれサブ目標が右側の方に書いてあります。

環境創造工学教育プログラムの学習・教育目標は、本科4年生から専攻科2年生までの学習・教育目標ということになります。

本校の本科の学習・教育目標のサブ目標と教育プログラムの学習・教育サブ目標は、達成すべき内容を含めましてそのサブ目標も変えてあります。

#### 評価及び提言 No. 4

提言4につきましては、資料1 - 2の6ページになります。

「目標を担うためのカリキュラム作りの取り組みが見えない。」というご指摘いただいておりますが、学習・教育目標を決めまして、その教育目標に従ってカリキュラムを編成し、それから達成度の評価を学生にアンケートをとって確認をしております。

#### 評価及び提言 No. 5

次に、教育方法ですが、提言5につきましては、「創造性豊かな学生を育てるために、個人を育てる教育も行っていただきたい。」これにつきましては、各学科創造教育に力点を置いております。具体的な科目につきまして、7ページから11ページにかけて、各学科のPBL科目、創造性を育てる科目のシラバスを記載しております。そのほかにも各学科、様々な創造教育の教科も配置しております。

#### 評価及び提言 No. 6

提言6では、「2,3年以内に抜本的なカリキュラムの改訂が必須となる。」とあるが、何故、2,3年以内なのが分からない。」というご指摘に対しまして、これは中学校の指導要領が改訂になって初めての学生が平成15年度に入学してくることから、その状況を調査しながら、カリキュラム改訂を行う必要があるとの認識です。現在それに取り組んでおります。

今回、高専の設置基準が変わりまして、大学と同じような単位の換算が認められました。そのような単位(学修単位)を配置した新しい18年度からのカリキュ

ラムもできております。また18年度新入生に対しましては、新しい学習・教育目標を設定いたしまして、それに基づくカリキュラムの編成が行われております。

#### 評価及び提言 No. 7・8

次に、提言7と提言8ですが、提言8につきましては、「中国語の科目を取り入れて欲しい。」ということに対しまして、これは13ページですが、授業科目の中に外国語として中国語も採用しております。

#### 評価及び提言 No. 9・10

提言9ですが、総合学力試験を実施しております、その表彰制度を設けてはどうかというご指摘ございました。現在、表彰制度を設けております。資料1-2の14ページに平成17年度、本年度の総合学力調査の成績優秀者を決定し、その表彰を行うということになっております。

#### 評価及び提言 No. 11・12

提言11ですが、「オフィス・アワーズが、シラバスに明示されていないため、学生への周知方法が分からない。また、その効果が上がっているのか分からない。」というご指摘です。4ページにも提言12という形でオフィス・アワーズに対する提言がございます。

現在、オフィス・アワーズにつきましては、資料1-2の14ページのとおり、「学生便覧」にも明記しております。また、教員室の入り口にオフィス・アワーズの時間、この曜日のこの時間は在室しておりますと掲示した掲示板を設けております。同時にその先生の担当する授業時間割も掲示してあります。先生が不在の場合この掲示を見て、学生はいつだったら先生がいらっしゃるか確認ができる体制で取り組んでおります。

#### 特命統括官(JABEE担当)の説明

【庶務課長】 次に、山田JABEE担当特命統括官、よろしくお願いたします。

#### 評価及び提言 No. 13

【JABEE担当特命統括官】 提言13,14を説明させていただきます。

13は、「JABEEのスタンダードよりも2段も3段も上になるような教育を行って欲しい。」というご要望でした。

JABEEのスタンダードといえますのは、学生の教育に

関しましてはAからHまでという厳しい要求があります。それから、専門科目に関しましては分野別要件が1項目あります。かなり高いものを要求されておるといことをちょっとお断りしておきたいと思っております。

そういう中で、平成15年度に2年間のJABEE認定を取得することができました。改善の余地はありますけれども、我が校の学習教育の質が、社会的に通用すると認められたというふうに考えております。平成16年度では、専攻科の修了生に対してJABEEの認定者は、21名に対して16名ということになっております。

先ほど教務主事からお話がありましたが、平成18年度以降の入学生を対象にして、新学習・教育目標を策定して、目的を達成するための教育課程の改訂も実施しております。

それ以後、平成17年11月にJABEEの中間審査を受けました。それに向けて様々な取り組みを行いました。

#### 評価及び提言 No. 14

提言14ですが、「時間はかかるが、しっかりとした技術を教育して欲しい。」というご要望がありました。

これに関しましては、まずJABEE認定を受けたということが、専攻科の修了生のみならず、本校の卒業生の教育も社会の要求を満足するものであるというふうに私たちは受け取っております。また、先ほどご説明ありました高専のロボコン大会等でも優秀な成績を残しております。そういう意味で、実践的な教育も成果が出ているというふうに認識をしております。

さらに、今までも、これからもですが、社会の要求を先取りできる教育・学習・評価を計画的に遂行して、PDCA(プラン・ドゥ・チェック・アクト)というサイクルを通して、ずっとスパイラルアップを図ってまいります。

#### 学生主事の説明

【庶務課長】 次に、西留学生主事、よろしくお願いたします。

#### 評価及び提言 No. 16

【学生主事】 私は、提言16についてお答えいたしません。

学生委員会というのは、学生が健やかに過ごせるように課外活動などを通じて支援いたしております。

技術者教育ではさらにその優秀な学生を伸ばして欲しいという、そのような教育を行っていただきたいという提言をいただいております。

そこで、優秀な学生をさらに伸ばすために、外部で行われるロボコン大会とかプロコン大会、英語弁論大会への支援。またさらに、資料1-2の16ページにございますように学内英語暗唱大会、弁論大会、読書感想文コンクール等も実施して、優秀者を表彰している次第でございます。

#### 特命統括官(留学生担当)の説明

【庶務課長】次に、嵯峨原留学生担当特命統括官、よろしく願いいたします。

#### 評価及び提言 No. 17

【留学生担当特命統括官】留学生統括官の嵯峨原と申します。提言17について説明いたします。

提言17として、「留学生を支援する体制を整えることは難しい。」という提言がありましたが、それに対して、留学生統括官、それから私が委員長をしております留学生専門委員会で留学生の支援体制を整えるためにさまざまな取り組みを行ってまいりました。

資料1の5ページに、項目を10個に分けてそこに挙げてあります。様々な取り組みをしてきた関係で、まだ完全に立ち上がっていないものもあります。留学生を支援する体制を整えることは難しいと委員からの評価及び提言がなされましたが、まだまだ不十分な点もありますが、この3年間で留学生を支援する体制はかなり整ったのではないかと考えております。

#### 特命統括官(ロボコン担当)の説明

【庶務課長】次に、内谷ロボコン担当特命統括官、よろしく願いいたします。

#### 評価及び提言 No. 18

【ロボコン担当特命統括官】ロボコンを担当いたします内谷です。

6ページの提言18ですが、「経費の面などでロボコン等支援の会があると思うが、国の支援の獲得などを模索してはどうか。」ということでしたけれども、国の支援というのは当然あって良いとは思いますが、なかなか難しく特に昨年度からは独立行政法人化されて、この支援はますます難しい状態になってきている

と思います。

そこで、本校では、ここにもご出席されています相良様を初めとしたOBを主体としました「ロボコン等支援の会」というのがございまして、そこから物心両面の支援をいただいて、平成14年7月には、校庭のすぐ左側に「夢工房」と呼ばれるロボット製作専用のプレハブを建てていただきました。

国の支援につきましては、高専機構にも働きかけて検討していきたいとは思っておりますが、できることからということ、本校としてはロボコン等支援の会の協力を得ながら活動を活発化していこうと頑張っております。

#### 研究主事兼地域共同テクノセンター長の説明

【庶務課長】次に、大竹研究主事兼地域共同テクノセンター長、よろしく願いいたします。

#### 評価及び提言 No. 19

【研究主事兼地域共同テクノセンター長】提言19でございますが、研究の位置づけということで、「高専の研究はコンセンサスがまだないとのことであるが、高専としての位置づけが必要ではないか。」というご提言をいただいております。

これまで確かに研究の明確な位置づけはなされておりましたが、平成16年度の高専の独法化に伴いまして、共同研究が業務の1つとして明文化されているところでございます。

資料3の39ページから44ページに関係した資料を載せておりますが、卒業研究、専攻科の特別研究等で研究の重要性は十分認識されていると考えているところでございます。

また、地域共同テクノセンター、錦江湾テクノパーククラブを設置いたしまして共同研究の推進にも活用しておりますことから、研究の重要性については認識いたしているところでございます。

ただ、まだ十分にコンセンサスがとれていないという面もございますので、これから研究の必要性につきまして講演会等の啓蒙活動が必要かと思っておりますし、研究促進のために、卒業研究、特別研究をベースにいたしまして、学会発表、論文投稿あるいは特許の取得等を進めていき、地域共同テクノセンターあるいは錦江

湾テクノパーククラブを活用して共同研究をさらに進めていきたいと考えているところでございます。

#### 評価及び提言 No. 2 1

それからもう一つ、提言21のワシントン椰子の枝払いにつきましては、「ワシントン椰子の枝払い機は、とにかく急いで、本当にビジネスにして欲しい。」というご提言をいただいております。

昨年5月18日でございますが、おかげさまで、「隼人テクノ」を設立しました。これは最初のきっかけからご支援いただきました、本日、委員としてご出席いただいておりますかごしま産業支援センター専務理事の迫田様、それからベンチャー企業を立ち上げるに当たりましてご協力いただきました、本日、委員としてご出席いただいておりますトヨタ車体研究所、錦江湾テクノパーククラブの会長でもございます谷口社長様には、この場をおかりしまして厚くお礼申し上げます。

それで、かごしま産業支援センターには企業化前からご支援いただいております、研究開発していく場面でも様々なご協力いただき、昨年5月に改良を重ねまして一応企業化の目処を立てまして設立しました。20日に県庁の方で記者会見を行いまして、各報道機関に記事を載せていただいたところでございます。

ただ、さらに軽量化等の改良や伐採しました枯れ枝のチップの資源化など、これから解決しなければならないことが多くございますので、これをさらに技術開発していきたいと考えているところでございます。

なお、トヨタ車体研究所様とともに共同特許を出願中でございます。

#### 庶務課長の説明

【庶務課長】最後に私の方からご説明いたします。資料1の4ページを見ていただきたいと思います。

#### 評価及び提言 No. 1 5

提言15「教員団が活性化するようなシステム作りが重要である。」について説明いたします。学生への教育・課外活動、学校運営等に貢献した者に対しまして、平成13年度から「教育功労者」として表彰を実施しております。

その関係資料で1 - 2の15ページをご覧くださいと思います。

ここに数年の表彰者一覧がございます。平成17年度も3名表彰いたしております。

下の表には、学校外の表彰で14、15年度を載せております。16、17年度も推薦いたしましたが、残念ながら被表彰者はありませんでした。

#### 評価及び提言 No. 2 0

次に、資料1の7ページの提言20でございます。

「高専のPRはもっと積極的に取り組むべきである。」というところでございますけれども、平成17年8月21日、日曜日の午前10時半から11時までの間、MBC南日本放送におきまして、鹿児島高専の特別番組「未来のエンジニアを目指して～魅力あふれる鹿児島高専～」が放映されました。翌週の深夜に再放送をいただいております。時間は25分で構成されております。放映後は、高専紹介用DVDを作製しまして、鹿児島県下の中学校に配布しているところでございます。今後も引き続きいろいろアピールして、優秀な新入生獲得へ結びつけていく必要があると考えております。

#### 評価及び提言 No. 2 2

最後の8ページの提言22でございます。

「独立行政法人化に伴い、その状況を全教職員に周知徹底する必要があるのではないか。」ということで、法人化を前に、教職員を対象としました説明会を計4回開催いたしました。

法人化後は、今度は適用法令が労基法や労働安全衛生法になりますが、過半数代表者といろいろな積極的に意見交換を行っていく予定にしております。

提言等につきましては以上でございます。

#### 各種委員会の主な取り組み

【庶務課長】引き続きまして、資料2の各委員会等の取り組みにつきまして、河野教務主事、よろしくお願いたします。

#### 教務主事の説明

【教務主事】教務委員会といたしまして、資料2に14項目挙げておりますけれども、大体主なところをご説明したいと思います。

まず、2番目の「単位修得最低点の改訂」ですが、従来、50点以上で単位修得ということでしたが、専攻科の単位認定基準（60点）との格差是正、それから学

生の学力の向上を目指した措置ということで、平成16年度から全学年60点以上に改訂しました。

4番目の「学力選抜試験の採点実施曜日の変更」ということで、本年度につきましても、2月19日の日曜日に学力選抜試験が行われますが、その日の内に採点を終えることで、なるべく月曜日の授業を確保することにしております。

7番目ですが、「県内大学との授業交流協定」ということで、本校も、高等教育機関の一機関といたしまして、平成15年9月、県内の国公立大学・短大が加盟しております授業交流協定に加盟しました。これによりまして、本科4年、5年及び専攻科生は県内各大学、短大で授業を受け、単位修得する道が開かれております。今年度、夏休みに鹿屋体育大学の講座に14名、鹿児島国際大学の講座に31名、鹿児島純心大学の講座に20名参加しております。その内の大部分の学生が単位を修得しております。

2ページの8番目、入学者の受け入れ方針を制定したということ、これについては先ほどご説明を申し上げました。

9番目が、「高等専門学校を設置基準の一部改正に伴う高等専門学校における単位計算方法の見直しとカリキュラム改訂」です。

高専は30時間1単位ですが、大学などの国際的標準単位というのは45時間1単位です。国際的評価や対応では不利益になるというようなこともございました。高専の30時間1単位は履修単位と呼んでおりますけれども、この国際的標準単位である45時間1単位は学修単位と呼んでおります。実際は学修単位の45時間というのは、15時間から30時間の授業時間プラス30時間から15時間の自学自習を義務づけるというものです。授業の時間としては少なくなります、自学自習を入れた形で勉強をさせるということが、今後、自学自習のしつけをつける意味を含めまして大事だということになります。卒業しましても、最新の技術を習得していくために、また生涯教育のためには、自学自習が必要だということから、このような見直しが行われております。

10番目ですが、これは先ほど申し上げました新学習・教育目標が承認され、平成18年度入学生からカリ

キュラムが改訂されました。

最後、14番目ですが、「1年生保護者の授業参観ツアー」を実施いたしました。1年生の保護者を対象に素顔の学生や普段着の鹿児島高専に接していただくということで、保護者の授業参観を実施しております。

#### 学生主事の説明

【庶務課長】 次に、西留学生主事、よろしく申し上げます。

【学生主事】 資料の3ページをご覧ください。

学生委員会としましては、主な取り組みをここに10項目挙げてございます。

特に1番目の「朝の挨拶運動」ということで、学生委員会は、先ほどから申し上げておりますように学生の課外活動を通しまして健やかに学生が育って欲しいということで、朝、学校に来るときに大きな声で学生に声かけしております。

それから、不定期でしたけれども、学生会と学生委員会の会合を持っておりましたが、これを定期的に最低月に一回は持つようになりました。そのために学生会の活動が非常に活発になってきております。

学生指導研究会では、弁護士の先生4名、鹿児島県の指導主事の先生1名の合計5名を招いて、特に学校の学生のための安全ということで講演いただきまして、教職員の取り組みが非常に変わってきたんじゃないかと感じております。

それから地域との様々な協議会、研修会がございまして、これに積極的に参加させていただいて、いろいろと学生指導に生かしております。

寮では毎年避難訓練を行っていましたが、学校での避難訓練は行われていなかったので、学校全体での避難訓練というのに取り組みました。

また、毎年うちの体育祭というのは非常に活発なんです、やぐらを何も免許を持たずに組み立てていましたが、今年は教員が免許を取りまして、安全に配慮しまして、やぐらを組ませるようにいたしました。

#### 寮務主事の説明

【庶務課長】 申し訳ありませんが、ちょっと時間が押しておりますので、主な一、二点だけをご説明して

いただければと思います。

次は、赤澤寮務主事、よろしく願いいたします。

【寮務主事】 寮関係、2つに話を絞ってご紹介いたします。

第1項目の学寮チュートリアルですけれども、平成13年から実施しております、5年目になります。上級生が下級生の勉強を見るという薩摩藩時代の「郷中教育」に学ぶシステムをうまく活用しております。

2点目は、第10項目の報告になりますけれども、精神的に弱い子供たちが増えているように感じています。そういう子供たちにしっかりと時間をかけて向き合う舎監さんというのを来年度の4月から導入したいと考えております。

#### 研究主事兼地域共同テクノセンター長の説明

【庶務課長】 次に、大竹研究主事兼地域共同テクノセンター長、よろしく願いいたします。

【研究主事兼地域共同テクノセンター長】 それでは、私の方からは、研究促進委員会及び地域共同テクノセンター運営委員会関係についてご説明いたします。

まず、6ページの研究促進委員会関係でございますが、幾つかに絞ってご説明いたします。

5番目のところに書いてありますが、企業ニーズの把握のためということで、現在、手分けをいたしまして、共同研究等のきっかけつくりのため、地元の企業訪問を行っております。

それから6番目と7番目に関係いたしますが、研究者総覧ということで、これは各研究者の研究分野あるいは業績等をまとめまして、鹿児島高専の本校のホームページに公開するようにいたしております。このデータに基づきまして、7番目に書いておりますように、研究業績を数値化し、このデータを使って広報を始めたところでございます。

それから研究報告ということで、毎年8月に学内の研究をまとめ報告しておりますが、これも本校のホームページ上に掲載しているところでございます。

地域共同テクノセンター運営委員会関係ということで、これも幾つかまとめる形で申し上げます。

まず、24ページの3番目のところに書いております「学生ベンチャービジネスプランコンテスト」、これは先ほどのベンチャー企業の「隼人テクノ」を立ち上げるきっかけになったわけでございますが、平成15年度につきましては奨励賞を2件いただいております。

4番目のところですが、一昨年になります、平成16年6月に文部科学省より、南九州地区担当ということで、産学官連携のコーディネーターとして中原さんに来ていただき、現在、活躍していただいているところでございます。

25ページの7番目でございますが、「高専発ベンチャー企業設立」、これは先ほどご説明したとおりでございますが、昨年5月にベンチャー企業の「隼人テクノ」を設立しているところでございます。

11番目、先ほど教務主事からお話がありましたけれども、今年度、経済産業省の「高専を活用した地域企業の若手人材育成の事業に対する調査」の事業を受託しまして進めているところでございます。これは平成18年度に人材育成事業が予定されておりますが、これへ繋げていきたいと考えているところでございます。

最後に、26ページの12番のところですが、皆様のお手元に差し上げております鹿児島高専の「研究シーズ集」が完成いたしました、これを地元企業様の方にお送りして、3月10日に予定しています錦江湾テクノパーククラブで研究室の紹介等に役立てたいと考えているところでございます。

#### 機械工学科長の説明

【庶務課長】 次は、池田機械工学科長、よろしく願いいたします。

【機械工学科長】 資料2の7ページをご覧ください。かいつまんでご説明を申し上げます。

機械工学科の教育目標の1つであります3番目の「社会に貢献できる機械技術者の育成を実現する。」ということのために、卒業生、企業からの要望が最近強くなっております情報システム系の科目を重視すること、新カリキュラムの改訂を行っております。これまでの機械の基礎科目のほかに情報システム、メカトロニクス系などのシステム工学関連科目を加えま

して、機械の基礎の上に情報システム系の分野も修得した技術者の養成を目指しております。

そのほかに、教育目標2の「物づくりをとおした創造力豊かな機械技術者の養成」を行うために創作活動を低学年に導入することにいたしました。これまでも鳥人間コンテスト、あるいはロボットコンテストといった製作にも機械工学科の学生が積極的に参加しております。

さらに、機械工場の実習内容につきましても検討を始めております。

資料には書いてございませんが、来年度から高専間の人事交流が実施されます。機械工学科の実習担当の教員が1名、来年度他の高専へ転勤いたします。その一方で商船高専から同じ分野の教員が本校機械工学科に赴任することになっておりまして、この交流によって来校する教員を交えて実習内容の検討をさらに行う予定にしております。

#### 電気電子工学科長の説明

【庶務課長】次に、本部電気電子工学科長、よろしくをお願いいたします。

【電気電子工学科長】電気電子工学科の取り組みについてご説明いたします。

資料の8ページから10ページ目でございますけれども、主な取り組みといたしましては、平成18年度から、新しい1年生に対する新学習単位、あるいは2年生から5年生に対する基準単位に関するカリキュラムの編成に取り組んでまいりました。

私どもの電気電子工学科は、現在、国家資格であります電気主任技術者の認定校になってございまして、その資格認定に必要な科目につきましてはこれまでどおりきちんと時間をかけて教育をすることを基本方針に掲げまして、特に新1年生に対するカリキュラムの主な取り組みといたしまして、1つの授業を学期単位で修了させるといういわゆるセメスター制度を意識したようなカリキュラムの編成を行いました。

2つ目といたしましては、本校の教育目標にもございます実践的な技術者の育成とありますが、それに重点を置きまして、実験・実習をさらに重要視するとい

う観点から、この実験・実習の単位を必修単位にする。いわゆるこの単位を1単位でも落とした場合には卒業できないという科目にいたしまして、座学だけでなくやはり実験・実習を通して学んだ技術、知識をより本物にしていくという、そういう狙いでございます。

そのほかに進捗状況に合わせまして、開講時期の見直しとかあるいは統廃合等も行っております。

2番目に書いておりますけれども、電気主任技術者につきましては、5年に1回ほど九州経済産業局から審査がございまして、その審査を平成17年11月に受けております。これにつきましても、これまでどおり、特に問題なく審査が終了いたしました、継続して認定されるという見通しでございます。

そのほか、次のページにあります3から6の項目について取り組みました。

#### 電子制御工学科長の説明

【庶務課長】次に、坪井電子制御工学科長、よろしくをお願いいたします。

【電子制御工学科長】電子制御工学科のこの3年間の取り組みをかいつまんで説明させていただきます。

まず、資料の10ページの「新カリキュラムについて」とございまして、非常に長文でございますので、大きな狙いを3つ申し上げます。

まず第1に、主要科目の学年間の連続性を確保するという狙いで改訂しています。これは具体的に申しますと、従来1年生と3年生で開講していた科目、2年生がブランクになっているとか、単年度だけで開講していて学生が十分な理解が追いつかないというような科目もございましたけれども、その辺を改善するために、3年間連続した授業を持つ、単年度だった科目を2年間で講義する、そういうような感じで、主要科目、電気回路とか機械工作法、こういうものについて充実させていくというのが1つでございます。

2つ目は、社会のニーズにこたえた新科目の設立ということで、最近盛んになってきましたネットワークの利用とか、ヒューマノイドロボットとか、そういうところに着眼しまして、ロボット工学、ネットワーク概論という科目を追加しております。

3番目は、新しい科目を新設するに当たって時間確保のために、従来やや冗長に過ぎた科目の一部を、ほかの科目に統合しまして、必要なところだけいつまんで教えるという形に改善していくというところがございます。

この新カリキュラムの狙いというのは、学生の平均学力の向上と底辺の学生の学力アップということになりますが、その一方で成績の優秀な学生は少々物足りなさを感じるという面もあるかと思しますので、これはカリキュラムにはございませんけれども、個別指導として公的資格の取得という指導をしております、それは次の12ページの8項目に書いてございますけれども、この成果があらわれまして、4年生で技術士の第1次試験を合格した学生とか、5年生でデジタル検定に全国第2位の非常に優秀な成績で合格した学生が出始めて、成果をあらわし始めていると考えております。

#### 情報工学科長の説明

【庶務課長】次に、加治佐情報工学科長、よろしくお願いたします。

【情報工学科長】情報工学科の主な取り組みのうち、1番目の新カリキュラムについて説明します。

新カリキュラムの作成に当たりましては、より情報工学のカラーを出すように努めました。具体的には、他科目との関連性が低く、情報工学科の専門科目として必要性の低い「図学」、「機械工学概論」という科目を廃止しまして、「電気回路」と「電子回路」につきましては、必要性の低いところを削除して時間調整を図りました。これに代わりまして、情報技術を利用した演習を主体とした「情報技術応用」、「情報技術応用」という新しい科目を新設しました。

そのほか、6科目に関しまして、内容をより分かりやすい科目名あるいはより一般的な科目名へ変更しました。具体的には、その中に書いてありますように、コンピューターリテラシー、「技術実習」という名前を使っていたのですが、そういった一般的な名前、あるいは「言語処理系」、「オペレーティングシステム」、「音声信号処理」、そういったような一般的な科目名に

変更しました。

それから、「データ構造とアルゴリズム」、もう一つ「計算機アーキテクチャ」というのは大事な科目なんですけれども、これを選択科目から必修科目へ変更しまして、実施年度も5年次から4年生次へ変更して、早期に修得が図られるようにしました。

全般的に大きなカリキュラムの変更は行っておりませんが、より情報工学科あるいは情報技術に即したカリキュラムへ変更しました。

#### 土木工学科長の説明

【庶務課長】次に、平田土木工学科長、よろしくお願いたします。

【土木工学科長】リッチでしたたか、そして頑固な土木について説明いたします。

なぜリッチかといいますと、資料3の87ページをご覧いただきながら話を聞いてください。

土木工学科は20年以上前から、コンクリートの圧縮強度試験を行っております。花壇の縁石に並べるあの材料の圧縮強度試験を行っておりが、図8-3では15年度、16年度、17年度は途中までですが、試験件数が一番多いのは今年です。

試験結果は電算処理されますので、データの正確さ、データ処理の迅速さというのは、試験依頼者から非常に評価されておりまして、毎年かなりの金額を確保しています。平成16年度では2200万円ほど外部資金として獲得しました。お陰さまで土木工学科の教育研究費は非常に潤っておりまして、この資金で1人当たり150万円ほど利用させていただいております。これはリッチでございます。

2番目、少子化対策ですが、土木業界はご存じのとおり公共事業が非常に減少しています。それから市町村合併で公務員はどんどん余剰人員が出てきております。県もそうでございます。そのうち道州制とか言われるようになって公務員の採用枠が非常に減ってきております。不況のときには公務員をみんな目指しますが、採用がなかなか難しいということで、「少子化対策」のところの文章の中に書いておりましたが、ここ3年間、卒業時進路未決定の学生が7名、6名、今年



は1名いました。就職先が決まらないまま卒業する学生が出てきました。これは大変だということで、団塊の世代の退職が間近に迫っていることもありまして、今年度は民間企業が人を採り始めましたので、学生を民間の方に進めました。そうしたら割と早く就職が決まり出しまして、今、決まっていない学生は1名で女性ですが、地元の企業にもう決まりそうです。今年は全員就職が内定して卒業しそうです。

こういう情報は県下の中学生にすぐ広まります。だんだん入り口の学生が減ってきています。去年4月に入ってきた学生は、実は第1志望では定員を2人ほど割った結果になり、これは大変なことだということで、平成17年度は毎回教室会議で、定員を確保するための対策に取り組んでまいりました。まだ願書締め切りは終わっていないのですが、今年は2月6日現在、40名定員のところを57名の志願者が確保されたということで、不況ですけれども、したたかに学生を集めてきたということを報告させていただきます。

なぜ頑固かというのは、土木工学科、それから土木工学専攻の名前を持っている高専は、全国で鹿児島高専だけです。したたかにそれを守り続けて、地元の、県下のために頑張らせていただきたいと思います。

【庶務課長】 実はもう予定では休憩時間に入っているんですけども、申し訳ありませんが、委員長、ここで一言よろしいでしょうか。

【委員長】 どうぞ。

### 意見交換

【庶務課長】 急で申し訳ありません。本日、笹川先生が3時半に退席されます。もしよろしければ最初にご意見・ご提言を賜りたいと思います。途中で本当に申し訳ございませんがよろしく願いいたします。

### 笹川委員からの意見と応答

【笹川委員】 済みません。本当に素人で、今お聞きしていたのですが、十分理解したかどうかは分からないまま、意見と言えるようなものではないかもしれませんが、感想を少し言わせていただきます。

一般科目のところで質問したかったのですが、高専

というのが、高校と大学との課程を一緒にするというで、大学で言う教養課程というのももちろんされるわけですね。その中でカリキュラムを見ていただいて私が法律関係だからというわけではないんですが、法律だとか経済だとか、それが選択になっていって、この高専が技術者を育てるという目標は分かっているつもりですが、ただ、大学的な側面もあるということだと思いますと、もう少し一般教養的な科目を充実しても良いのではないかという感想を持ちました。

それから、これも大変失礼なことかもしれないですが、一般の人に対して高専というのがどれだけ浸透しているだろうかということを考えるときに、多分私もそうなんですけれども、一番最初に頭に思い浮かべてくるのがロボットコンテストだと思うんです。この会議の前に校長先生からもお話がありましたけれども、昔は十何倍という競争率だったのが、今、2倍ぐらいだとかいうようなことで、やはり一般の人に対して、知られていないことはないと思いますが、余り興味を持たれていない部分があるのではないかなというふうに思っています。

それで、中学校だとかそういうところに進学の関係でいろいろ資料を配られたりはしていらっしゃるようなんですけれども、もっと早い段階から、鹿児島高専がここにあって、皆さんの近くにあるんだよということをもう少しアピールする意味で、例えばボランティア活動で駅の清掃をしているというが書いてあったと思いますが、それだけに限らないと思うんですけれども、何か高専の学生がというか、高専がここにあるんですと、知ってくださいという意味で、そういうような活動をもう少しされた方が良いのかなという感じを持ちました。

それから、あと寮の中でのチューター制度はとても良いと思いました。県などの委員会でも、とにかく人づくりというのが大切だという話が出ていまして、やはりそのときに出てくるのが昔の薩摩の「郷中教育」です。それをそのまま今の現代に持ってくるわけにはいけないので、それを現代的な意味に置き換えて、どうかそれを取り入れられないかという話がいつも出てくるような気がします。そういう意味では、高専ではそれを実践されているということで、これはとても

よろしいのではないかと思います。よければ、そのチューター制度について学生側がどういうふう感想を持っているのかということをお聞かせいただければありがたいと思います。

それから、ちょっと職業柄なんですけど、セクハラについての委員会があったと思いますけれども、具体的にはどのような体制をとっておられるのか。よく今、スクールセクハラというか、こちらにも女性の学生さんがいらっしゃるということでしたので、ここだけではなくて、すべての大学や学校について言えることなんですけれども、セクハラだけではなくて広く言えば人権侵害というような言い方もできるんですけど、そういうときに対応できる委員会というのがきちんと備わっているか。それがきちんと働いている、これも非常にそういう意味では良い委員会だと思うんですけども、内部だけで処理をするのではなくて、やはり外部の専門家なりそういう人も入れて対処をするという制度を、教育機関である以上やはりそういうおそれもあるわけですので、備えておく必要はあると思います。ですから、その委員会についての現在の体制についてお伺いできればありがたいと思います。

【校長】 どうもありがとうございました。

大変的を射た指摘を4点いただいたと思います。

1点は、本校は技術者教育が主体であるという基礎のもとなんですけど、教養関係の授業がちょっと手薄じゃないかというようなことをご指摘されたと思います。

まさに高専卒業生は、大学の工学系の卒業生に比べて、専門の技術についてはむしろ大学以上だと。だけれども弱い点があると。それは英語力と一般教養だというようなことを言われてきました。まさにその点を前から感じておりましたが、ちょうどタイミングよく日本技術者教育認定機構を受審するというので、技術者はやはり社会的な倫理感を持たなくちゃいけないということと、それから世界に羽ばたく技術者のためにはグローバルの考え方を持たなければならない。グローバルとは何かというと、それぞれの国の文化を理解することがまず一番だと。そしてコミュニケーションする能力も持たなくては行けないと。そういうことがありまして、本校もその点はJABEEに通るためというだけ

ではなくて、以前からそういうところもやらなくてはならないと思っていたものですから、力を今、入れているところではありますが、まだ不十分ながら、将来ともこれに向けて遵守させたいと思っております。

それから、2番目に一般社会への広報が少し足りないのではないかとということがございました。

これは、本校だけに限らず、全国の国立高等専門学校でやはり広報が足りない。中央教育審議会の委員が大方針を決定しますが、委員の方から「高専って何？」と聞かれたとってびっくりしていたわけですが、そういうことで、社会的に余りよく知られていないということが問題になりました。高専機構の中でも広報委員会というのをトップランクの委員会にいたしまして広報に力を入れることにして、今、動き始めております。幸い九州・沖縄地区の中から私も広報委員に選ばれてまして、今、活動しております。

具体的に、入学した学生に「高専というのは誰に勧められましたか。誰に聞きましたか。」と言って、今年度、調査しましたところ、一番多かったのが「親から聞いた」というのが36%。全国55高専の全統計を見ましたが、2番目が「パンフレット」、3番目が「中学校の先生」。中学校の先生より親から聞いたのが多いということは、これはやっぱり社会からの認識と違いますか、社会で新聞だとかテレビだとか、そういうことで親が知って子供に勧めた。就職率が良いということなども新聞によく出ますので、そういうことかなと思います。

鹿児島高専に限って言いますと、全国的な統計結果とちょっと違ひまして、鹿児島高専は教員がすべての中学校に出向きまして学校紹介をしております。また、中学生を本校に招いて、オープンキャンパスを行っております。そのことが統計的にも出ておりまして、鹿児島高専の場合は「体験入学で高専を選んでいる。」と、これは本人の意思だと思えます。これは鹿児島高専としては良い試みをやっているというふうに思っております。

それにしても、笹川委員がおっしゃいましたように、これからももう少し強力で広報していかなくてはならないというように、体制を整えているところでもあります。

それから3番目の寮のチュートリアルですが、これは全国の55高専の中で鹿児島高専の寮生数は日本一でございます。560~570名。全学生数が1,000名のところ560名入っております。これはただ寝て泊まるというのではなく、やはりこれは教育寮として、朝から寝るまでタイムスケジュールで学生が自主的に行動するという教育寮として位置付けておりまして、その中にチュートリアルということで、高学年が低学年を教えるということを実際行っていて、精神的に、そして具体的にどのような成果があったかということは、後で寮務主事に簡単に説明していただきます。

それから4番目のセクハラで具体的な体制はどうなっているかということで、外部の専門家なども入れたりすべきではないかということでございましたが、この件につきましては庶務課長に説明していただきます。

最初に、チュートリアルの物心両面の効果を寮務主事、お願いいたします。

【寮務主事】 先ほどお話ししましたように本年で5年目に入っております。12月の試験のときに5日間行いました。5年生を中心に10名のチューター、5学科ありますので、1学科2名ずつです。これに対しまして、5日間に延べで80名の1、2年生を中心にした学生が参加しています。

その総括的な話ですけれども、数年前のアンケートによりますと、「受講してよかった。」という意見を8割ぐらいが述べています。「成績が上がった。」という意見が多くありました。そのほかに、「上級生との交流ができた。」という意見もございました。

なお、上級生につきましては、寮生活をしているとアルバイトができません。大学生は家庭教師等を行っていると思いますが、チューターの時給は700円程度ということで1日3時間、それが5日間で大体1万円ぐらい、ちょっとしたアルバイトということで上級生にも好評です。自分の試験勉強を差しおいて下級生の相手をするわけですから少々大変なんですけど、そういうところで上級生のほうの満足も図ろうかと考えています。

【庶務課長】 セクハラで私の方からご説明いた

します。

本校にもセクシュアル・ハラスメント防止対策委員会というのがございます。その中でも調停委員会、さらに調査委員会というのを設けるようにしております。その前に、まず相談があると思いますので、看護師さんとか、私も相談員になっているんですけども、あと各学科に相談員を置いております。そう深刻でない相談もたまにはあるようです。

その他、ご指摘の外部委員の件ですけれども、これは私、大学の方でもちょっと経験したんですけども、今、大学等では顧問弁護士がいらっしゃいまして、そういう方に入っていたいただいているところもあるように聞いております。ただ、本校の場合は、小さな組織ということもありまして、今の組織の規則の中では特に外部の方は入っておりません。おっしゃるように、深刻な内容になりますと、笹川先生みたいな弁護士の方に入ってくださいとか、そこら辺はこれから要検討ではないかというふうに感じております。

## 休 憩

【庶務課長】 ここで、笹川先生の方のご意見・ご提言を伺いましたので、先ほどの続きということですが、いかがいたしましょうか、一度休憩をとりましょうか。

【委員長】 そうですね、では、10分程度休憩をとってからにしましょうか。

【庶務課長】 では、3時32分から再開いたしますので、よろしくお願いいたします。

## 再 開

【委員長】 高専の方の説明が大分残っているようですが、このまま説明を継続しますと大分時間が超過しそうなので、あとは専攻科長さんの方からの説明をお聞きして、その後は外部評価委員の方々にご意見をいただくというふうに進行したいと思います。

それでは、専攻科長さんの説明をお願いします。

## 専攻科長の説明

【専攻科長】 済みません。本来カットしてもよかったのですが、少し記述に分かりにくいところがありま

したので、そこを補足したいと思います。

資料の19ページ、専攻科の一番上に「長期インターンシップ」というところがあります。以前は全員に長期インターンシップを義務づけておりましたが、受け入れ先の確保、それから専攻科生向けの実習テーマ、そういうものがなかなか確保できないということで16年度以降変更しております。

そこで、その文章ですけれども、「16年度以降は修了要件」とありますけれども、専攻科の修了要件ではありませんで、JABEEの教育プログラムの修了要件であります。ですから、「JABEE修了要件」という形で補足をさせていただきたいと思います。

それから、内容をインターンシップではなくて、「インターンシップもしくはPBLの修得」へと変更をお願いした。」とありますけれども、これはどこにお願いしたかといいますと、JABEE委員会をお願いいたしました。本校におけるJABEEの修了要件等を検討して定めておりますJABEE委員会に今まではインターンシップを修了要件としていたところを、「インターンシップもしくはPBLの修得」というぐあいに変更してくださいとお願いしたと、そういう意味であります。

結果的には長期インターンシップを受ける学生がぐっと減りましたけれども、現状ではちょっと致し方がないかなということでもあります。

ほかの点に関しては、もう時間も来ておりますのでお読みいただきたいと思います。

以上です。

### 意見交換

【委員長】 それでは、高専の方からの説明をこれで終わらせていただいて、委員の方々からのご質問とかご意見をいただきたいと思います。

また、それに対しまして、高専の方から回答であるとか、高専としてのご意見をお伺いしたいと思います。

時間を切らしていただいて、委員1人当たり大体4分程度でご質問していただいて、それで高専の方から4分程度の回答ということで、お1人当たり8分程度というところを目処に進行したいと思いますので、ご協力よろしくお願いいたします。

順番ですけれども、この外部評価委員会の委員名簿

がございますけれども、これの吉永委員から順番にやっていただいて、吉永委員、迫田委員、谷口委員、宮下委員、吉原委員、相良委員、最後に私の方で質問させていただきますと思います。

予定の時間が4時半に終了ということでしたが、それまでにはちょっと終わりそうにありませんが、委員の皆さんで何か時間の都合で先にしたいという方がいらっしゃいますでしょうか。よろしいですか。少し時間が延びると思いますが、よろしくお願いいたします。

それでは、吉永委員からお願いします。

### 吉永委員からの意見と応答

【吉永委員】 教育部長の吉永です。私、この道の者でございませぬので、少し分からないところがあるんですが、この頃の明るいニュースで、町のエンジニアの評価を高めたといえますのは、こんなにそばにこんな人がいるというような印象を日本中に振りまいたのが、ノーベル賞を受賞された島津製作所の田中耕一さんだったのではないかと考えております。

あの方は、インタビューを受けているときの非常に正直なところがよかったですね。「ダンスはできない。」とか「これから英語のスピーチを勉強しなくちゃ」とかおっしゃっていました。また、「燕尾服はレンタルで間に合わせます。」とか、非常に自分の身の周りにいらっしゃるような感じがして、身近な感じがしたんですね。そういった明るい話題もあったんですけども、技術にまつわる暗い、重い、苦しいような話題も結構ございました。例えばこの頃の話で言いますと、JR西日本の過密ダイヤから事故につながった問題とか、三菱自動車のリコール隠しとか、松下電器の欠陥ストーブとか、いろいろございました。

これは研究人が開発した技術をいかに利用し、社会に役立てていくかという段階での問題でございまして、技術者自体の問題ではないのかもしれないけれども、そういった社内の技術者というのは非常に責任感を感じながらも、社内の情報を外部にリークするぐらいしか対処の方法を持っていないというような、ちょっと悲しい状況というのがあるのではないかなあというふうに思っております。

「自己点検報告書」の中に、「相手の立場に立っても

のを考える技術者」,「人としての倫理観を身につけ, 善良な市民として」,あるいは「技術者が社会に対して 負う責任を理解する」とかというような目標を掲げて教育に当たっていらっしゃいます。

こういったところは非常に難しい問題なんですけれども, どういったふうに教育がされていくか, 学生たちがどういったふうな受けとめ方をしているのかなど 思っていたんですが,「学習・教育目標達成度評価アンケート結果」というのが出ておりました。これについてもうちょっと今の問題なんかについてご説明をいただけたらと思います。

先ほど弁護士の笹川委員が一般教養カリキュラムに ちょっと不足があるんじゃないかというような意見をおっしゃいましたけれども, 私は別にそうは思わなかったんですけれども, そういった部分についてどういった教育がなされているかということでちょっとご説明をいただきたいと思います。

【校長】 技術者として社会に出ていくわけですが, 社会に出ていきますと, 技術あるいは労働社会の中で だんだん職位が高くなるわけですが, その地位が高くなればなるほどそれに見合った特性といえますか人間性, そういうものを培って行って, 技術, 地位と特性とがバランスできるような, そういう人間になって欲しいという気持ちを込めて, 4 番目の学習・教育目標をつくりました。そういう考え方で教育し, 学生がどう感じているか, そして具体的にどのような変化があるかというご質問だと思いますが, なかなか数字で出るようなことではございませんのでちょっと答えにくいのですが, 学生主事がそういう学問の教育以外にも学生生活の教育をしておりますので, 学生主事の方からコメントをお願いしたいと思います。

【学生主事】 答えになるかどうか分かりませんが, 授業の中では専攻科に技術者倫理がありますが, 私たち学生会で取り組んでいる中では, 朝, 少しでも大きな声で挨拶する中で明るさを取り戻して, その日の一日を授業に取り組んだり, 課外活動に取り組んだりという方向に, いわゆる落ち込んでいる心が健やかになるようなそういう取り組みも 1 つの運動かなと思って,

今年度から毎朝, 正門前に立っております。

それと, 2 年前までは教室の清掃は各学生, クラスごとに行っておりましたが, 一昨年から月曜日の 2 時間目終了後, 教職員, 学生一斉に清掃に取り組んでおります。10 分間だけですが, 以前に比べかなり学内がきれいになっております。

そういう中であっても, やっぱりちょっとモラルに欠けた立ち食いとかありますので, そんなところでも注意したり, また学生同士が注意し合ったりしております。

私がお答えできるところはこれぐらいです。

【教務主事】 「相手の立場に立ってものを考える技術者」というところでは, 教科で言いますと例えば工学実験とか実習というようなものがあります。実験につきましても, 1 人でやるというのではなくて, 何人かのチームで, 1 つのテーマに対して実験をすることになります。また, 専攻科では, 技術者倫理という科目を配置しております。そのほか環境関係の科目などが配置されております。

姉齒建築士の問題, 本当に学生も実際そういう技術者がいるということ自体が信じられないということをおっしゃっています。そういう内容の記事その他の報道を通じまして, 技術者倫理に対してはやはり学生自身に啓蒙を行っていく必要があると思います。

専攻科の方で何か追加することがありますか。

【専攻科長】 専攻科よりは, もしかしたら JABEE 担当特命統括官の方がふさわしいのかもしれませんが, 専攻科では, 科目名としては「技術倫理」ですが, 一般的にいわれる技術者倫理, これは必修になっております。これは JABEE の修了要件といえますか, JABEE の基準の中に技術者倫理, これは必ず修得しなければなりません。これは現在の社会情勢から当然の要請ではあるんですが, そのために専攻科の中の一般科目の中に「技術倫理」という科目がございまして, これは必修になっておりますので, 専攻科を修了する場合はその科目を必ず修得しなければならない。

ですから, 先ほどのアンケートのところ, 専攻科の方までいきますと, 「学習・教育目標」の 4 - 1, 4

- 2ですね、特に「4 - 2 技術者が社会に対して負う責任を理解する」この部分に対応するのが「技術倫理」という科目になっているということです。科目を履修して、自分も確かにそうなったと思うということで達成度が100%になっていると思います。そういうことで、一応専攻科の方まで進学しますと、技術者倫理に関する教育には力を入れているというふうにご理解いただければと思います。

### 迫田委員からの意見と応答

【委員長】 それでは、次に迫田委員、お願いします。

【迫田委員】 先ほど来、担当の方から様々な説明をいただきまして、高専全体としてより良い学校づくりに一生懸命取り組んでいるなど、そんな印象を持ちました。

個々のことについてはもうお話しすることはちょっとやめたいと思いますけれども、私はアバウトな観点から少し提言なりあるいはご意見をいたしたいと思えます。第1点は、鹿児島高専も独立法人化されて2年近くになるわけですね。それで、独法化されることによって学校運営などでより自由度が高まったと思えますが、例えば隣にいる宮下支社長から、法人化されてどういう点に力点を置いて学校運営に当たられているんですかというご質問に対して、さてさてどういう取り組みをされているのかなど。これまでの延長線ですよということなのか、あるいはこういう点に力点を置いて、もういろんな取り組みをされているから説明しづらいのかもしれませんが、どこに力点を置いて取り組まれているのか。その辺があるのかないのかということをお聞きしたい。

それからこれは私からのまた1つの提言というか、参考にしていただきたいと思うんですけれども、先般城山観光ホテルで京セラの伊藤相談役の話がございました。大竹先生もお見えでございましたけれども、「経営について思うこと」ということで、前会長、その前は京セラの社長さんをされた方なんですけれども、話の中心は、企業経営には経営理念が大事だ。企業経営者は、社員と経営理念を共有して、会社をいかに闘争する集団、燃える集団にするかが問われている。京セ

ラ時代はそのことに全力を注いだというお話でございました。そして、企業理念が希薄化したときに企業の命運は尽きるということも言っておられました。学校経営と企業経営は必ずしもイコールではないわけですから、参考になるかどうか分かりませんが、ぜひお耳に入れたいなと思ってお話をさせていただきました。

それから高専との絡みではもう1つ、ものづくりは無機物に魂を入れることだと、良いものをつくろう、人に喜んでもらえるものをつくろうという熱き思いがないと、なかなか良いものはできないんだと、そんなこともおっしゃってありました。

前回のこの有識者懇談会で日本一の高専にすべきだというお話もあったようでございますけれども 私は、日本一は何なのかということもあるので、やはりぜひ地域と密着した、地域の企業と密着した鹿児島高専というものをぜひつくっていただきたい。それが一体何なのかというのはあると思えます。

それからその教育の中に、京セラさんやあるいはトヨタ生産方式を実践されているトヨタ車体研究所などもあるわけですから、ぜひそういう企業との連携もとって教育に生かしていただきたい、そのように思っています。

独法化されたということではなかなか難しいことではありますが、これまで以上により開かれた学校づくりなり、親しまれる学校づくり、あるいは地域とともにある学校づくりということを少し目標に置いて取り組んでいただければと思います。

そういう観点からすると、先ほど名簿を見せていただいて少しやはりまだまだ堅苦しい。職名に特命統括官なんてちょっと近寄りたいですね。これは文科省との関係ではこれで良いと思えますが、やっぱりもうちょっと県民なりを向いた視点からすると、もう少しやさしい職名でもおつくりになった方が良いのではないかなと、こんな思いもいたしました。

余りにもアバウト過ぎて難しい質問ですから、お答えできる範囲で構いません。

【委員長】 どうぞ高専の方からご回答をお願いします。

【校長】 4点ご指摘いただいたと思いますが、1番目が、独法化に対してどんな取り組みをしているか。2番目に、京セラを例にとられて、企業では企業理念、経営理念というのがあがるが、教育の場では教育理念は鹿児島高専としてどういうものを持っているかということ。3番目に、ものづくりは無機物に魂を入れることだということですが、これを行うためにどのような取り組みでやっているか。そして、地域と密着した連携をすることを勧めるというようなこと。そして4番目に、特命統括官というのはちょっと余りにお役人的過ぎるということでした。

まず、独法化の取り組みについては、一番問題なのは労基法の世界に入ったということで戸惑っているところではありますが、これは庶務課長の方から説明をお願いいたします。

【庶務課長】 私の方からご説明いたします。

法人化になりまして、国家公務員の身分から非公務員に教職員の身分が変更になっております。そこで大きく変わった適用法律としましては、国家公務員法、人事院規則から、一般の社会人の方はそうなんですけれども、労働基準法、労働安全衛生法、労働組合法が適用になっております。その中でも特に労働基準法を重視した服務的な、人事的な対応ということで、特に庶務課においてはやってきております。

それと、人事院規則にもありましたが、特に労働安全衛生法関係で、校内の安全と衛生、こちらも労働安全衛生を中心にきちんと対応していくよう常に考えております。

また、法人化後、団結権、団体交渉権は大体認めておりましたが、新たに争議権が加わりました。ただ、今のところ本校には労働組合はありませんが、過半数代表者はおりますので、過半数代表者を中心とした各労働者からの意見は十二分に酌んでいきたいと考えているところでございます。

【校長】 2番目の教育理念のことですが、京セラの会長もよく言われていますが、人間の仕事の達成度はどういうことで分析されるかというようなことで、人間の能力と熱意と考え方であるというようなことを強

調されております。能力は0から100点、熱意は0から100点、考え方はマイナス100点からプラス100点だということで、能力は比較的先天的なこともありますけれども、熱意に関してはこれはもう全くやる気の問題だから、これは努力次第では幾らでも伸びる。考え方につきましては、先ほどのいろんな社会事件が起きていますけれども、これはもうどんなに能力と熱意があっても考え方がマイナスであれば、これは全く逆の社会的な効果があるんだというような説明をされています。本校といたしましては、学習・教育目標の4番目に掲げています「相手の立場に立ってものを考える技術」ということで、相手の立場に立てば、相手の立場というのはもうそれぞれいろんなことがあるわけですが、ものづくりであれば最終的にはものを使う人の立場、そして地球の立場、そういうことでやっていかなくてはならない。学習・教育目標の4番目は本校の特徴的な目標ということで、これに力を入れてやっているところでもあります。

それから3番目のものづくりのことですが、無機物に魂を入れるということで、実践的な実習の時間を鹿児島大学の工学部、機械系と電気系で比較しますと、手を使って実習するという時間は2倍強時間をとっておりまして、実際にブラックボックスの中をあけて考えるという経験をさせております。

地域との連携につきましては、地域共同テクノセンターを中心に働きかけて実際に実効を上げているところですが、大竹先生、何かコメントございましたらお願いします。

【研究主事兼地域共同テクノセンター長】 それでは、私の方から少しコメントさせていただきたいと思えます。

ものづくりということで本校でも取り組んでいるところですが、地元との関係ということで、1つの成果としては、ベンチャー企業の「隼人テクノ」を立ち上げさせていただいたということがありますし、また「錦江湾テクノパーククラブ」を通して活動しています。

具体的なことを申し上げますと、3月10日に第4回の錦江湾テクノパーククラブの例会を予定しておりまして、今度は地元企業の皆様に研究室のシーズといい

ますか、研究室のラボツアーという言い方がよろしいかと思いますが、鹿児島大学で既に実行されておりまして、そのミニ版という形になるかと思いますが、それを計画しております。

そのために委員の皆様のお手元に冊子を差し上げておりますが、「研究シーズ集」を地元企業、公的機関等の約320社に送付いたしまして、3月10日の研究室紹介見学のご案内を差し上げようと考えているところでございます。

それからもう1点、今年度、経済産業省の若手人材育成のための事前調査事業を受託いたしました。県内・県外約2,000社に若手人材に必要なニーズ等のアンケートを差し上げているところでございます。また、卒業生・OBの方約1,000名にも案内を差し上げて、今、そのアンケートの回答をいただいているところであります。

その中でこういうアンケート答えていただけるか少々不安な面もございましたが、1つ例を申し上げますと、こういう手紙が入ってありました。「我が社を選んでいただいて大変ありがとうございました。」と、それで会社の概要等も送っていただきまして、非常に感謝頂いた言葉もございました。また、就職等あるいは共同研究につながっていけばというように考えております。

【校長】 4番目の特命統括官という名称ですが、この名前をつけたとき、私どももちょっと抵抗がありましたんですけれども。法人化されましたので、少なくとも官というのは良くないというふうに感じております。

ただし、この特命統括官というものをつくりまして仕事が非常に能率的にされている、実効は上がっているというのが現実であります。大半の委員会は学科の代表者の集まりの委員会が多いんですが、この特命統括官は校長直属で、校長から直接こういうことをしてくれないかということをお願いしているということで、非常に能率的に事が運んでおります。4つの特命統括官、FD担当、留学生担当、JABEE担当、ロボコン担当があり、それぞれ短期間で実効が上がっておりますが、名称に関してはご指摘のように良いものに変更しよう

と思いますので、次回にはご報告できると思います。

【迫田委員】 私どもセンターで毎月1回、全員で研修会を開いております。講師は職員なんです。私は1月に講師を職員に対して行いましたが、それは、「トヨタの高級車ブランド「レクサス」の品質革命について」ということで、これは去年「日経ビジネス」に載っていたものを私がまとめて、職員に30分ぐらい講義というか、今、ものづくりの最先端はここまでやるのかというような取り組みをしていましたので、それを職員にちょっとお話ししました。そのレジュメをここに持ってきておりますので、校長先生にこれをお目通しいただいて何か参考にしていただければなと思ってます。

#### 谷口委員からの意見と応答

【委員長】 それでは、谷口委員、お願いします。

【谷口委員】 今回、「自己点検評価・報告書」等のたくさんの資料をいただいて、最初に感じたことは時間軸が分からないんですね。

先ほど校長先生が言われましたけれども、苦言を言うと、ちょっとスピードがと。2年経っていますよね。企業は、長期というのはなかなか難しいので中期計画を立てて、3年後、5年後をどうするか。それからそれに沿って来年どうするんだという計画を年度末に立てますよね。今、私どもの会社でも昨年立てた今年度の計画がどうなっているんだと、来年どうするんだという評価を今、始めていて、そういうふうになるわけですね。ということで、時間軸が分からない点。それから今回の評価についても、この評価の結果をどういうふうにして反映するかというのが、ずっと見たのですが、なかなかあらわれてこないとちょっと思いました。

ずっと説明を聞いていくと、私、口が悪いんですけど、言い過ぎるんですが、3年間と言われていたわけですね。この3年間の中身を見ますと、私の感覚でいくと、ここの評価でしていったって、点検でまずいねと言っていることに対して、ここ3年間どうしてきたかということじゃないかなというふうには私は思いました。



ですから、有識者の評価の結果の報告なんかは私は逆に要らないのではないかと。それは当然、例えば今日もし提言があるとしたら、私は学校は全然分かりませんので、どういう方針で来年度どうするんだと、そういう方針を立てられるのかはちょっと分かりませんが、それに対してこういうふうに織り込んで、結果としてはこうなっていると、そういうことになるのではないかなと思いました。

ずっと読ませていただいたんですが、これも辛口になるんですが、分析結果というのがいろいろ書いてありますが、ちょっと目標が分からないんですね。「相応である。」と書いてあるんですが、これは何を相応としているのかというのが分からない。だから、これはベンチマークをして、例えばほかの学校を見てそれに勝っているのか。そんなに簡単ではないと思いますけれども、そういうところがちょっと分かりません。

それと、企業はもう紙の枚数を減らせと言っているんですね。もうこんなに出したら怒られるんです。放り出されるんです。私は、できれば、これだとA3の1枚にまとめていただいて、目標がどうで、今、高専が一番課題としているのは何だと、それを今、評価するとこういうところに来ていて、高専としては来年、再来年、3年後どうするんだと、そういうふうなまとめ方をされないと、これだけの枚数を見て、高専の問題点は何だと言われても分かりにくいから、そういうふうに考えられた方が良いのかなと思いました。

【委員長】 それでは、高専の方からお願いします。

【校長】 一番痛いところをつかれたと思いますが、時間軸が分からないと、成果が見えないということだと思いますが、時間軸については私どもは大学よりはましだと思っております。具体的に言いますと、JABEEの取り組みにつきましても、大学はもう6～7年ぐらい前から始めていまして、そこで勉強されたことをうちがお聞きして、平成13年から取り組みを始めたんですけれども、大学を抜きました。そういうことで、組織的に小さいせいもありますけれども、まとまりは非常によろしいということで、取り組みから成果までの時間は大学よりもかなり短い時間を出していると自負

しております。

ただし、企業から見ますとスパンが確かに長いわけですね。会社だったら7カ月でやるところを4～5年かかってやったりするということは確かにあります。高専機構本部の中期計画は5年計画で目標を立てていますが、なるべく時間軸はきちっとして、短い時間で成果を上げるように努力したいと思います。

それから「自己点検・評価報告書」の内容のボリュームが多過ぎるということで、分析結果に「相応」と書いてありますが、これは大学評価・学位授与機構による機関別認証評価を7年に1回、平成18年度受けることになっていますが、その評価書の体裁に沿ってまとめたのがこの「自己点検・評価報告書第4号」でありまして、確かにむだが多いと感じていますが、少々やむを得ない事情でこういうまとめ方をしております。

トヨタ車体研究所とものづくりの連携をとらせていただいたおかげで、ワシントン椰子枝払いの機械ができたんですが、これも時間軸がしっかりしていないということを最初から言われ続けていまして、もう少し短い、一月とかそういう短い時間で目標を立てて成果を上げていきなさいということ強く指導を受けて機械ができたという経験がございますので、企業の考え方もできるだけ取り入れながら目標を明確にしてこれから取り組んでいきたいと思っております。

【谷口委員】 済みません。本当に学校のことを余り知らずに好きなことを言いましたけれども、多分そうだと思うんですね。大学はもっとゆったりしているんじゃないかと。私は高専さんがこういう評価をされているというのは本当に素晴らしいことだと思っております。

#### 宮下委員からの意見と応答

【委員長】 それでは、宮下委員、お願いします。

【宮下委員】 地元の新聞社の立場から、二、三言わせていただきます。

学生確保が命題だというお話が冒頭ありました。独法化されて、これからは学校間の競争も激しくなっていくでしょう。あるいは将来、あそこの高専が良いよ

ということで県外の高専に進学するなど、高専間の競争があるかもしれません。そういった意味ではさらにPRが必要ですし、そのためには、高専は結構マスコミに対して露出度は高い方だと思うんですけども、もっとマスコミを活用して欲しいと思います。

現在、うちの方にはいろいろファックスなどをいただいたりしますが、事後ファックスも結構多いため、事前に情報をいただきたい。これは私どもがアンテナを張っていない、私どもの努力の足りない部分もあるんですが、例えばロボコンで全国大会に行く場合に、主催がNHKという問題もあるんでしょうけれども、例えば地元のテレビ局に連絡してもらったら、東京支所にカメラもありますので、現地の当日の大会の様子を地元のテレビ局も追いかけたんでしょうが、いわば鹿児島から九州選抜代表で出かれますから、そうしたらそれをその日の夕方のニュースに流せた。またうちも東京支社に言って生で流せた。そういった意味ではもう少し、私たちの努力も必要なんですが、さまざまな細かい情報をいただきたい。

そのためには 私としては今の状態は良いんですが、今はうちだけに情報がほとんど来ていますけれども、もっと記者クラブを活用して欲しいと思います。国分・加治木記者クラブがあります。ここにはテレビ局、新聞社の担当者があります。ファックスを流したら、各社に入ります。あと鹿児島市内にはこちらにない全国紙などもありますので、鹿児島市内にある県の政調会の記者クラブにぜひ情報を流していただきたいと思います。

高専は県庁所在地にないところが多いですので、マスコミは全国紙を含めて県庁所在地が中心ですね。そういった意味では、年に1回どうでしょうか、マスコミの方を呼んで説明会などされたいかがでしょうか。2時間ぐらいが良いと思います。説明会と学校施設案内ですね。それにより関心を持った記者が随時また来ることになるかもしれません。

高専と知っていても中身を知らないというのが地元紙の私も含めて結構多いです。時期的には、マスコミの担当者が変わった異動の後の4月のゴールデンウィークの前ぐらいだったら、高専とはどんなものかというのを新しい大学担当の記者が知ったり、新しく鹿児

島支局に来た全国紙の記者が知ったりすることができると思います。その際、同時に地元の記者クラブにも声をかけて欲しいと思います。

あと、マスコミの評価が世間の評価になる部分があったりしているような問題があるんですが、万一不祥事があった場合、高専は高校1年から3年生、大学1年、2年という多感な子供を抱えているため、何が起ってもおかしくない学校だと思います。それが起こっていないこと自体がすごいなと思っているんですけども、万一何かあった場合の対応は大丈夫でしょうか。マスコミはばんばん追いかけてきます。事件・事故に巻き込まれたら、単なる第三者的には被害者かもしれませんが、高専はこういった場合の対応は大丈夫でしょうか。夜間に電話が鳴り、警備員さんが取られると思います。そのときに警備員さんは誰にどのように繋ぐかとか、そういう学校側の危機管理ですね、マスコミ対応というのは準備された方が良いと思います。その基本は、スピーディでオープン、都合の悪いことこそオープンにしてくださいれば、やっぱり私たち取材側の受け取り方は違いますし、その方面への影響も大きいと思います。

あと学生確保で言うと、スポーツにももっと力を入れて良いんじゃないかと思います。ここはサッカーは結構強いです。自転車も意外と良いですね、バスケットも。サッカーは冬場がメインのスポーツです。ですから、公立高校の進学校は冬場の全国選手権の県予選に出られません。高専は出られるんじゃないですかね、そのまま4年生に進級できるわけですから。そういった意味では、ほかの進学校は2年生しか県予選に出られないんですが、高専は3年生が出られて鹿児島実業などと試合ができる。決勝で鹿児島実業に勝つのは難しいでしょうけれども、準決勝まで残るだけでもマスコミへの露出度が上がります。高専という名前が知れますね。そういった意味で、スポーツにも力を入れていって欲しいと思います。

あと中国語、韓国語も履修が始まったとありますが、4年生からとなっていました。どうでしょうか。語学というのは人によって個人差がすごくあります。耳がいい子はすごく覚えが早いです。希望者は1年生から

でも受講できるような、そういう柔軟な対応はできないものではないかと思えます。

それに関連するんですが、一般教養、先ほど弁護士  
の笹川委員もおっしゃいましたけれども、一般教養に  
もやっぱり力を入れて欲しいと思えます。先生もおも  
しろい人材をそろえてはいかがでしょうか。高専の教  
員というのは余り異動がないというイメージがあるん  
ですけれども、例えば志學館大学はホームページで人  
材を募集して、それまで関係なかった人が助教にな  
ったりしています。将来もう少し自由な採用もできる  
でしょうし、高専間の交流、大学の教員との交流とい  
うのももう少し活発にはいかがでしょうか。理科  
系の子供が文化系の部分で秀でたことをするとおもし  
ろい人物になる可能性があります。うちのデータベー  
スを見ますと、去年、土井晩翠賞を鹿児島在住の詩人  
の方が受賞していますが、この方は高専出身でした。  
ですから、いろんな人物を育てるという意味では、高  
専は5年間という間で人を育てるわけですから、いま  
少し教員もおもしろい方を採用することを考えて欲し  
いと思えます。

そして1つだけ最後に、寮は1年生は今のところ基  
本的には全員強制ですね。これも例えば、何人かに聞  
いたんですが、「寮はいいよ」とOBの方もおっしゃる。  
現役の方にさっき聞いても「いいですよ」とおっしゃ  
る。特徴がもしれません。今後の学生確保を考えた  
ときに、基本的には1年生全員というのを柔軟なふう  
に考えても良いのかどうか、そういった検討をされた  
ことがあるのかどうか。善し悪しなんですけど、1年生  
は必ず入寮しなければならないというところは今後を  
考えたらどうなのかなあと思いました。

【委員長】 高専の方からお願いします。

【校長】 大変ありがたいお申し出をいただきまし  
てまことに感激しております。

入学志願者の確保ということで、全国的に高専機構  
として取り組んでいるところであります。15歳人口が  
1990年度200万人あったのが、現在130万人になっ  
ているということで、ものすごいスピードで15歳人口が  
減っております。特に鹿児島県内の統計によりますと、

平成15年から毎年1割ぐらいずつ減っているとい  
うことで危機感を感じなくてはならないということござ  
います。幸いに15歳人口に占める国立高専志願率を  
分母に15歳人口をとりますと高専志願率は逆に上昇し  
ておりまして、ということは、15歳人口が減っても高  
専への志願者は減っていないということの数字が出て  
おりまして、その点はおかげさまでありがたいと思っ  
ております。

さらに、これからも安泰ではないわけですので、高  
専という高等教育機関をもう少し多くの国民に知っ  
ていただくべく、そのためにはマスコミを利用して欲  
しいということをおっしゃっていただきましたので、  
ぜひ記者クラブにファックスをこれからうるさいぐら  
い入れたいと思っておりますし、また、マスコミの方  
を鹿児島高専に1年に1回ゴールデンウィークの前あ  
たりにお呼びして、説明会ということも検討させて  
いただきたいと思います。

それから次に、15~20歳の非常に多感な学生を持  
っているということで、毎日緊張感でもって進めている  
わけでありまして、特に学生主事、寮務主事というの  
は本当に2年間勤めている間に白髪がふえるというよ  
うな、そういうような厳しい仕事をさせていただいて  
いますが、やはり危機感には常に持ち続けてきているつ  
もりです。未然に事件が起こらないように心配してい  
るつもりですが、その点はさらに気を引き締めて危機  
管理をしたいと思えます。後ほど事務部長の方から危  
機管理について説明させていただきます。

それから次に、3番目といいましょうか、スポーツ  
に力を入れて欲しいということで、これはやはり技術  
者を育てていくところですからけれども、やはり技術、  
技を身につけることはもちろんですけれども、やはり  
創造力というのは左脳だけじゃなくて右脳も活性化さ  
せなくちゃいけないと、そういう意味でもスポーツは  
非常に重要だというふうに考えておりまして、1,000  
名の学生の7割ぐらいは何らかのクラブ活動に入って  
おります。

やはりスポーツで一生懸命やっている学生というの  
は、見ただけでももう目の光から違うんですね。それ  
から相手の立場に立ってものを考えるという、そう  
いう人間性もできてきております。そういうことで、ス

ポーツだけではございませんけれども、クラブ活動もぜひ頑張りなさいということで勤めているところであります。

冬場に3年生が高校の試合に出られますので、チャンス逃さないようにというお言葉でありましたので、スポーツの指導者に伝えておきたいと思えます。

それから4番目に、中国語、韓国語を入れたのは非常に結構だけれども、低学年のカリキュラムに入れた方が良くないかということでございましたが、この点は後ほど教務主事に答えていただきます。

それから一般教養に力を入れて欲しいと、そのためにはおもしろい先生を採用しなさいと、自由な採用ができるように努力しなさいと、高専間の交流ももう少しやったらどうかというようなことがございました。高専間の教員交流ということは実は18年度からスタートして、先ほど報告がありましたけれども、平成18年度に私どもの教員が有明高専に籍を移します。そしてほかの高専から1人本校に来ますので、これを契機に教員の方も人事異動ができるようなきっかけができるんじゃないかと思っております。

それから6番目に、寮で教育するというには非常に意義があるということの評価していただきましたが、1年生を無理やり入れるのはちょっと問題があるんじゃないかなということでございますが、この件につきましては寮務主事に後ほど説明していただきます。

それでは、危機管理について、事務部長、お願いします。

【事務部長】 危機管理についてどうなっているのかというような質問かと思いますが、本校では危機管理については、防災の面、事故・事件、あるいは風水害等もろもろ突発的な事件・事故等について、連絡網というものをそれぞれ設けてございます。例えば学生の課外活動の事故等であれば、学生主事を通じて迅速に校長まで報告し、それで対策をとる。あるいは学生が事件・事故を起こした、あるいは巻き込まれた、そういう場合においても同様の連絡網のもとで取り組んでおります。

また、未然に学外からの不審者等の侵入等も防ぐという意味もありまして、正門の閉門時間を見直したり、

あるいは守衛所のところにカメラを据えつけていたり、そういう自衛策も行い未然に防げるように取り組んでおります。また、守衛さんは民間の方を委託業務ということで雇っておるんですが、その辺についても連絡がきちっととれて学外からの対応にも迅速に対応できるような体制で取り組んでおります。

【校長】 それでは、中国語、韓国語を低学年のカリキュラムに移せるかどうかについて、教務主事、お願いします。

【教務主事】 先ほど資料1 - 2の13ページのところで中国語、韓国語が入っていますという話をいたしました。

本年度、海外語学研修旅行でカナダに1週間程度のホームステイを計画しております。これには2年生から5年生までの学生に応募を呼びかけております。結果としては十数名の希望がございました。来年度からはこれをある程度制度化したいという希望があります。2年生の時点において海外語学研修ということで英語圏に行って、そして実際英語を使わないと会話ができないという状況まで追いやって勉強させる。これも非常に効果的なことではないかと思っております。

また、電子制御工学科の工場見学旅行でこれまで2回ほどオーストラリアに行っております。そのクラスの学生のTOEICの成績が、ほかのクラスと比較すると飛び抜けて高いという結果がでております。やはり語学につきましては、啓蒙が必要だと思います。自分の英語を話してみても通じたのか通じなかったのかというカルチャーショックを受けて帰ってきたことが、それ以降の英語教育に役立ったのではないかというような評価をしております。

語学というのはとにかく若いうちというのが基本であろうかと思えます。韓国語、中国語につきましては、それがカリキュラム上実施可能かということの問題だけであります。初歩の段階の内容の授業で、低学年でというようなことが可能であれば、低学年に入れられると思えます。ただ、全学的に共通でその科目を受講するという形になりますと、時間割編成上あるいは人数の関係上なかなか無理があると判断しております。

先ほど言いましたように、語学については若いうち  
にというのが基本ですから、そういう効果を考えた上  
でのカリキュラム配置というのも今後、検討してい  
きたいと思っております。

【校長】 1年生の全寮制の意義について、寮務主事、  
お願いします。

【寮務主事】 本校では1年生全寮制をとっておりま  
す。ただし、男子定員550名の寮で、そこには1年生か  
ら5年生、そして専攻科生、留学生がいます。女子の  
定員は50名です。

それで、1年生全寮制と申しまして、上級生の女  
子学生はやはり指導上いて欲しいというのがあります  
ので、定員の関係で1年生の女子については自宅から  
通える人はなるべく自宅から通ってくださいという指  
導しています。

男子につきましても、少子化というようなことで兄  
弟間あるいは仲間同士、その辺の付き合いがうまくで  
きない、そういう子供たち、あるいは病気等で食事関  
係で自宅から通学した方が良い学生については自宅通  
学を認めております。

現実には、5年間あるいは7年間、寮で生活をした  
いと思っている学生も結構います。ただし、定員の都  
合上、かなりの数の上級生が入れないという状態でも  
ありますので、5年間あるいは7年間、寮にいたいと  
思ったら、経済的な側面を考慮するような対応をとり、  
それを高専のPRの1つとして、安心して寮生活、学校  
生活を送れるというようなところで募集することによ  
り、受験を希望する学生が増えるということも考えら  
れます。様々な問題があるうかと思いますが、  
全寮制は検討課題の1つだと考えております。

【校長】 1年生は完全強制ではなくて、緩やかな全  
寮制ということになっているということでございます。

【宮下委員】 近辺の方でなくても、鹿児島市の子  
ども寮に入りたくないという子は入らなくても良いの  
でしょうか。基本的には近辺と聞いているんですが、  
違うのでしょうか。

【寮務主事】 基本的には全寮制ですので近くの子も  
入らないといけません。ただし、特別な理由がある子  
につきましても、学生、保護者、担任あるいはカウン  
セラーの先生の意見を聞いて自宅通学を認めていると  
いう状況です。

【宮下委員】 特別というのは、例えば「うちの子は  
やっぱり家にいて欲しい。1人だから寂しいから」と  
いう鹿児島市内の家庭の子がいた場合には特別な事情  
になりますか。

【寮務主事】 そういう場合の退寮は認めていません。  
やはり集団生活になじめないんじゃないかと、そうい  
う子どもどうしてもいますので、そういう子については  
特別に、あるいは病気等で食事の関係上、特別に校長  
が退寮を許可するというシステムになっております。

【宮下委員】 本当に良いことだとは思いますが、  
もう少し柔軟に、たくさん入りたい希望者もいらっし  
やるみたいですし、定員オーバーしているんでしたら  
緩やかになっても良いかなという気もします。

#### 吉原委員からの意見と応答

【委員長】 それでは、吉原委員、お願いします。

【吉原委員】 私は先ほどの谷口さんと意見が全然違  
うんですが、「国家百年の計は人にあり」と言われてい  
ることから、人間づくりというのはそう簡単ではない  
と思います。産官学と言いましても、やっぱりそれぞ  
れ独立したものがどこまでいけるか。

ただ、共通した面は、もう少しスピーディでありた  
いなという面は、私も会社を経営してまして、会社  
の立場からするとそれは感じますので、どこまで人づ  
くりとそれを一致させていったら良いのかなというの  
は感じます。平成14年度外部評価報告書を見まして、  
この学校の評価は第三者評価委員である私どもと内部  
評価の皆様方、改善できるかできないか、あるいは勝  
手なことを言っている私どもの意見にどれほど取り組  
んでおられるかという点においては非常に高い評価を

したいと思っています。とても真剣に取り組んでいらっしゃると思います。

鹿児島高専だけに土木工学科があるというのは知りませんが、ぜひ頑固な土木工学科でいて欲しいと思います。

それともう1件、私、ここにとても良い資料があったので、これだけは言わせていただこうと思っていたのですが、風土工学というのは、竹林先生という今の国土交通省、元の建設省におられた先生が考えられた工学なんです、いわゆる風土学の風土ですよ。和辻哲郎さんの「風土」と同じ風土と書きます。土は地元の人、地域の人、風は県外というかその地域以外の風であり、土である地域の人と風を起こす周りの人とで風土というものができると、それが地域だというふうに書いておられて納得しました。

それに対して、私は感性工学というのに非常に興味を持っていて、これは元広島大学の長町先生という呉高専にもいらっしゃった方が考えられたもので、かれこれ40年前になりますが、そのころから山口大学と山梨大学においては感性工学というのがあったそうです。

ところが、その後、どこの高専にもこの感性工学というのできていない。この感性工学とは何かといいますと、要するに長町先生が考えられた40年前には、物をどんどんつくっても売れる時代だと。しかし、これからはつくったものがすべて売れるような時代ではなくなると。それに対して、高専、大学、研究機関は世の中のニーズにどのように対応すれば良いかということを考えながら、それを解決しなければならぬという問題提起を考えられて、感性工学というものをつくられたんだそうです。

なぜ、私が、感心したかといいますと、40年たって今、確かにその時代が来ましたよね。つくったけれども売れなければ何にもならないわけですね。企業と一致していると思います。大学もせっかく良い人材を育てても就職しますので、就職後の後追い調査が必要でしょう。

1月19日に「知事と語る会」で伊藤知事がおっしゃっていましたが、今、産廃あるいは廃棄物をどうするかという大問題を非常に伊藤知事はうまくおっしゃっていました。それで私も納得して、時代がかか

わるニーズの問題とおっしゃっていました。

北九州市が今、ここにもありましたけれども、それやっていますけれども、鹿児島県はそれに対して5年計画で必ず港湾整備をして、志布志とか、あとは川内湾と言われたかな、そこら辺から北九州に追いつけ追い越せという形で港を整備して、産業廃棄物並びにトヨタさんのことも言っておられましたけれども、門司港から外国へ向けて出す港を整備をするんだと。絶対それを成功させなければ鹿児島県は成り立たないとおっしゃっていました。非常に上手に語られるので、私たちは半分ぐらい分からないままに納得したような感覚になりました。

その辺と感性工学という40年前に長町先生が考えられたことが、今まさしくそのとおりになっていますね。つくられてもそれが売れなければ、人材もそれがちゃんとお嫁入り先がなかったら何にもならない。プライマリバランスというんですかね、そこら辺のことも非常に考える時代になった。先見の明を持つ人材というのはその当時はとても排除されて、そんなことがというふうに言われるんですね。ところが、先見の明を持った人というのはその時代には対応できない。世間からは「うむ、変わり者だなあ」と言われる人でも、必ずその時代が来ることを察しておられるんですよ。

そういったものをやっぱり頑固な土木さんにぜひ頑張ってもらって、土木は決して悲観することもないと私も思っています。ただ、感覚的に思うだけじゃなくて、土木試験場に行きましたら廃棄物のこと、今、時代が抱える大問題、それはやっぱり土木の部分がしっかりと関係していますよね。建設と瓦解を繰り返していますので、そういう時代がまた社会のサイクルの中で必ず来ると思います。頑固に頑張りたいと思っていました。

1点だけ質問があるんですが、前田校長先生がこの資料4号の56ページの最後に、平田先生たちと一緒に「ゴミ焼却灰中に含まれる重金属元素の有効利用」という論文を発表しておられますよね。それについてどういった内容か、簡単にご説明願いたいと思います。

【校長】 吉原委員から励ましの言葉をたくさんいただきまして、ありがとうございました。

教育にはやっぱり時間がかかるんだということで、今、高専はそういう意味では高く評価するというお話、ありがたくお受けいたしました。

2番目に、風土工学とか感性工学と、そういうような内容の授業を設けたらどうかということですが、これは高専全体でもありますけれども、特に土木工学科に関係が深いんじゃないかということでございまして、検討したいと思います。その中で土木工学科に対しての温かい応援をありがとうございます。

3番目のご質問ですが、後ろの方の資料の56ページの「ゴミ焼却灰中に含まれる重金属元素の有効利用」ということで私も共同執筆者になっていますが、主に携わりましたのは大竹先生ですので、説明をお願いいたします。

【研究主事兼地域共同テクノセンター長】 それでは私の方からご説明いたします。

この研究は、以前前田校長先生が、砒素学会の会長をやっておられました。重金属の砒素あるいはアンチモンは非常に毒性が強うございますけれども、これが廃棄物の中の特に都市ごみ焼却灰に混入しているということで、この取り扱い、私は実は別の観点から、以前から重金属をうまく回収できないかということで考えておりました。砒素やアンチモン以外にもいろんな重金属が焼却、もちろんボトムアッシュ、フライアッシュで重金属に含まれる状況は全然違うのですけれども、一応対象としてはフライアッシュを対象にいたしました。こちらの方にいろいろ有害金属も含めているような重金属が含まれておりますので。

前田校長が砒素の方に昔から非常に関心を持っておられるということで、廃棄物中の有害な重金属について、具体的なことを言いますと、実は粒径によって含有率が違うというような話がございます、粒径による差を確認してもらいたいというようなこともございました。私の方は、今ご指摘がありましたようにいわゆるゼロエミッションということで、廃棄物じゃない資源だということで、ごみ焼却灰を資源化していければと。もちろんすべて利用することは難しゅうございますが、金属が回収できれば、コスト的には非常に問題はございますけれども、そういうふうこれからも

考えていかなければいけませんので、焼却灰から重金属を回収できないかということについては以前から、金属あるいはそのほかの生体物質に関しても抽出実験をずっと行っておりました。その関係でゴミ焼却灰中の重金属を、どういうふうな挙動をしているか、粒径による違いとか、どういうふう分布しているか、あるいはどういう焼却をしたときにどういうふうな金属が多く含まれるか、あるいは分布状況とかを調べまして、あとそれをどうやって取り除くかということですが、私は以前から溶媒抽出といたしまして、ある特殊な試薬を加えまして、それと反応する形で特定の金属を抽出するという研究をやっておりましたので、その手法が適用できないかということをやってまいりました。

ただ、まだほんの基礎的な実験を行っている状況でして、まだ応用例とかそこまでは至っておりません。焼却灰中の重金属の分布状況といえますか、粒径、酸類で一応ある程度抽出できるというのはもう分かっておりますので、塩酸とか硝酸とかそういう酸類を使って、とりあえずどういうふうな挙動といえますか、どの程度回収できるかという基礎的な実験を行っているところでございます。

簡単でございますけれども、以上のような研究を行っておりますので、よろしくをお願いいたします。

#### 相良委員からの意見と応答

【委員長】 それでは、相良委員、お願いします。

【相良委員】 前回の懇談会で提言いたしました中国語をカリキュラムに取り入れていただきましてありがとうございました。

でも、やはり早くから、そういう教育課程の中でなくても、何か同好会的なことからも始めていただいで、特に中国と姉妹校もあるし、これからの仕事には必ず中国語が必要だろうと思います。宮下支社長は香港にもおられましたので、そういうところで非常に中国語の重要性ということを感じられておられると思うので、良き理解者だと思います。

まず、土木ですね、日本に1つしかないということであれば、私はまず手堅く足固めというか、南九州、宮崎と熊本の各中学校に学校案内を全部出すべきじゃ

ないか。と言いますのは、鹿児島県で要するに今、定員割れをするというようなことであるにしても、それは就職がないからでなく、要するにニーズがたまたま鹿児島県としてそういう状況にあるというだけなので、九州全域に出しても良いんじゃないかなと思うんですよ。

この間、我々の同窓生でいろいろ話をしたんですが、鹿児島市役所、鹿児島県庁には鹿児島高専のOBが多分相当な数採用されている。市町村のかなりのところに土木の人間だけはきちっといますということで、もうしばらくしたら課長クラスがぞろぞろ出るということで、後の学生が続かなきゃいけないということを中心に言っておられましたので、そういう点では非常に活躍してくれているんじゃないかなと思います。私ども機械屋というのはもう本当に確立したものはありませんので、自分たちが頑張るしかないということにあるんですが、非常に土木の方は頑張っておられると思います。私はそういう状況であると知らなかったので安泰だと思っていたんですけども、ぜひ頑張りたいかなと思います。もしよければ、全国はまだ早いけれども、とりあえずは近くの県からPRしても良いんじゃないかなと思います。

それから学校の難しいことについてはまた別なんですけど、私は学校の中で学生に対してこうして先生たちが一生懸命考えて教育しようとしている姿を私どもが若いころに知っていたら、もっと勉強したんじゃないかな。それぐらい先生たちがよく考えてくれていたということに対して感謝します。

それで1つは、先日ちょっと同窓会のことを学校の先生方といろいろ話をしたときに、今後、夏休みなどの長期休業中に学生の寝泊まりが学校内でできなくなったなど、様々な難しい問題が出てきた。これは法人化されたことによって労働法の問題とかいろいろ絡んでいるんでしょうけれども、私は先生方に労働者になってほしくないなという考えなんです。先生は労働者にならないからこそ尊敬に値する。法律と人間とは違うので、ここは何か考えて欲しいなと思うんですが、非常に難しいことですから、これは私の希望でございます。

そして今後、鹿児島高専だけでなく、高専という学

校のスタイルはやはり少し変化するだろうと思うんですね、専攻科もできましたから。だけれども、先ほどから評価委員の皆さんが言われるように、高専というものは内側にいた者にしか分からないという寂しい思いがあるわけですね。PRしても分からないと思うんです。

だから、ぜひ今後、学生が技術者として国内で頑張っていけるのか、世界で頑張っていけるのか、鹿児島高専に入学したら、この技術だけは必ず修得してぴかぴかになるよと、もちろんJABEEもそうですし、そういうことを何か特化していただきたいなと思います。

【委員長】 高専の方からお願いします。

【校長】 中国語、韓国語を取り入れたことに対して評価いただきましたが、低学年のカリキュラムに入れるところまでいっておりません。同好会でも良いからそういう実績を積んでいくべきだというご提案、検討したいと思います。それから2番目の土木工学科、全国に1つしかないということで、このPRを近くの県から確実に足固めをすべきだということで、その方向で検討いたします。

それから3番目の休業中の合宿などができなくなったというのは、労働基準法の管理下にあるということのためでございますが、やはり教師は労働者になってほしくないというのは、もう校長を初め全教員がみんなそう思っております。労働者と思ったらこんなことはできないということで、労働基準法を守らなくてはならないけれども、自分の意思で時間外も頑張っていたらというのが現実でございます。その辺の兼ね合いが非常に難しいんですけども、うちの教職員はその辺を見極めてよくやってくれていると思っております。

それから高専の中で鹿児島高専を特化するような、そういうものも考えて欲しいということで、やっとロボコンが平成12年に初めて全国大会に行けるようになりましたが、これはまだ特化には入らないかもしれませんが、ほかの高専でやっていないことを、何か学生のためになることをこれからは真剣に考えていきたいなと思います。



## 赤坂委員長からの意見と応答

【委員長】 では、最後になりましたけれども、私の方から何点か伺いたいと思います。現実的な面も多いんですけども。

まず1点は、入り口の問題ということで中学校へのPRですね、これはいろいろなさっていると思うんですけども、通常の高校進学から大学進学とそういうのに対して、高専はどこが違うんだというその辺の差別化といいますか、5年間、7年間とあるわけですけども、どこにそういう教育のメリットがあるかというようなこと、その辺をはっきりさせていただくと良いんじゃないかなと思います。実習が多いとか、ロボコンとか、いろいろPRする点はあるんじゃないかと思うんですね。

多くの中学生はやっぱり普通高校から大学進学ということを考えているわけですから、それに対して高専はどこにメリットがあるのかということを中心に考えてやっていただくと良いんじゃないかなと思います。それがまず1点です。

それから実験・実習が多いということで、その人材の確保がなかなか難しいんだというようなことが評価されていると思いました。技術系の職員をその補助に使うといったようなことがありましたが、これが問題かどうかということとはよく分かりません。

1つ考えられるのは、専攻科ができて、例えば専攻生をティーチングアシスタントに活用するとか、これは高専機構の問題になるかと思うんですけども、今、大学は、大学院の学生がティーチングアシスタントとして学部学生を教育しているわけですね。特に実験・実習などの手がかかる教育に対して、TA制度は非常に有効に働いていると思うんですけども、高専でも専攻科ができて、かなり上のクラスの学生がいるわけですから、そういったものを教育に組み込んでやっていけないか。先ほど寮のチューターの制度とちょっと似ているんですけども、何かそういった制度の導入ということではできないんだろうかと思えます。

それからインターンシップの受け入れ先の確保でいろいろ苦労されているということでしたけれども、例えば錦江湾テクノパーククラブとか、そういったところと何らかの連携ができないのかといったことを考え

ます。インターンシップも随分年数がたちまして、考え方の違うインターンシップの制度というものが出てきているわけですね。そういったものを例えば九州経済産業局などがバックアップする、そんなこともありますので、ぜひインターンシップの強化といいますか、そういったことを考えてもらえると良いのではないかと思います。

それから研究面ですが、これは法人化で高専が研究に取り組むということがかなりしっかりと高専の目標に組み込まれたということがありましたけれども、それが全校的にというんでしょうか、コンセンサスがまだ十分には得られていないというお話がございました。これはぜひやはりコンセンサスを得るように努力をしていただきたいと思います。また、大学とはやっぱり違うわけで、大学と同じような研究をやってもやはり高専の特徴は出てこないと思います。だから、どこに高専としての研究の特色を出すかといったところを考えていただきたいと思います。

それから土木工学科から、受託研究で相当の収入があるとのことでしたが、受託研究、共同研究などの外部資金に対して、例えば何らかのオーバーヘッドとか、高専としてそれをある程度いただいて、全校的なところに活用するなどのシステムは導入されているかどうかということをお伺いしたいと思います。

それから共同研究を増やすということはぜひやっていただきたいんですが、そういう中に特に専攻科の学生を組み込んで、開発型の研究者といった面ではやはりそういう共同研究に学生を組み込んで一緒にやっていくということが非常に効果が上がるんじゃないかと思うんですね。そういったところをぜひやっていただきたいなと思います。

また、いろいろと共同研究、高専の方も研究シーズの資料をつくったりとか、いろんなPRをしておられるということがありましたけれども、鹿児島TL0がございまして、これは前田校長を初め高専の先生方も出資をされておられますので、ぜひこういったものも活用なさると良いんじゃないかなと思います。

あと1点だけですが、施設の老朽化ということが平成13～15年度の自己点検・評価の中にありましたが、これに対する今後の見通しというか、何らかの予算要

求であるとか、そういったことで施設老朽化の改善といったようなことがあるかどうか、どちらかというところローカルにお伺いしたいと思います。

【校長】 ありがとうございます。

8点、指摘、提言いただいたと思っております。

1番目の入り口の問題ですが、15歳人口は減っているけれども志願者は減らさないように、これは命題として考えております。

中学校を訪問したりするときに、中学生及びその指導教員に、高専とはどんなものかということをきちっと分かるような説明をすべきだと、差別化して説明すべきだというご提言で、全くそのとおりだと思っております。これまで説明するときの1つの考え方としては、大学はサイエンスの世界であって、高専の場合はテクノロジーだと。学問体系の向上というより技術を向上させるというところに特徴があって、人間で言えばニュートン的な人物の育成が大学であるとすれば、高専はエジソンを育てるんだというような説明の仕方をしております。

それから2番目に技術系職員のごことで、大学に比べて高専の場合、特に鹿児島高専の場合は技術室というものを設けまして、技術職員を1カ所に集めて、そこから各学科の実験・実習に派遣するという形をとっております。さらに赤坂委員長からは、専攻生をティーチングアシスタントという形で実験・実習に当たらせたらどうかというお考えですが、私どももそういうことも必要じゃないかということで検討したことがありますが、これからも考えていきたいと思っております。

それから3番目にインターンシップの受け入れ先の確保については、錦江湾テクノパーククラブなどをもっと積極的にお願いして利用すべきだということで、これはやっているんですけども、なかなか難しい面がありますけれども、努力が足りないところは積み重ねていきたいと思っております。

それから研究面でコンセンサスが得られていないというちょっとマイナスの自己評価をいたしましたけれども、全く得られていないわけではありませんで、学校全体として研究というのは、教育と研究のバランスがあります。研究も教育のためにあるんだということ

も言っておりますけれども、教育に専念する人と比較的研究の方の重点の高い人と、そういうのは先生方同士の間でお互いさまというふうな考え方で、自分が研究に多くのエネルギーを割いているときには教育の方を少し薄めにするとか、そういうような先生方それぞれがお互いさまという気持ちで譲り合って、学校全体としての研究のウェイトをある水準以上に高めたいというふうな考え方で行っております。ですが、なかなか学会誌に出す論文数が伸びていないというのが現状ですけれども、研究の中身が、大学での研究の中身よりももっと実践的な、言い方は悪いかもかもしれませんが、中小零細企業の相談に乗ってテーマが書けるような、そういうような敷居の低い研究機関でありたいと思っております。

それから5番目に土木工学科の受託試験、これで得られたお金を全学的な考え方でやるべきじゃないかということでございますが、確かに土木工学科としてはちょっと抵抗があるかもしれませんが、やっぱり試験機械を1カ所に集めて、そして鹿児島高専が受けるんだということで、土木で今やられている試験機械をある場所に1カ所に集めて、そして学校全体として受託試験を受けるような形で、そしてその何%かを学校に納めてもらうと、そういう形にはしたいと思っております。

それから共同研究は専攻科生を組み込んでやるべきじゃないかということで、この件も考えさせていただきたいと思っております。

それから7番目にTL0の活用ということで、これも検討させていただきます。

それから8番目の施設の老朽化につきまして、事務部長に今の取り組み状況を説明してもらいます。

【事務部長】 施設の整備状況ですが、平成15年度から5カ年計画で整備計画ということで取り組んでいたんですが、初年度につきましては、教室も狭隘化等の解消ということで1期工事だけは終わりました。その後、高専が法人化になったということで予算措置の関係がなかなか難しくなりまして、現在、1期工事を終わった段階で中断というか頓挫といえますか、延びております。それで、校長以下、高専機構あるいは文科

省に再三働きかけて、教育環境の整備充実ということで取り組んでいるところでございます。

その中でも今年は、今、各教室にクーラーのついていない部屋とついていない部屋があったわけですが、校長のいろんな要求等も通じまして、この4月からは全教室にクーラーもつくということで、少しは学生の教育環境もよくなるんですが、その後の校舎改修あるいは教室の狭隘化等の解消につきましては、19年度の概算要求に向けて今、学内で施設委員会を中心に検討を進めているところでございます。機構本部からは、新しい建物計画は出していただいてももう無理だということを言われております。そこで、どういう要求をしていくかということで、今、校長を中心に検討を進めているところでございます。

【委員長】 ありがとうございます。

教育、研究のウェイトをどう置くかということが、それぞれの教員で違っていいんじゃないかということとは全く賛成です。一方でまた学界誌に掲載されるとか、学位とかいった面の問題はあると思うんですが、余りそういうことにこだわると全く大学と同じになりますので、むしろニーズに対応していくとか、そういったところで特色を出した方が良いのではないかなと思います。

それから共同研究、受託研究については、先ほど平田先生がそうおっしゃったものですからそれを例に挙げて言ったんですけれども、別にそういった受託研究だけじゃなくて、そういうシステムの導入ということですよ。ほかにもいろいろとなさる方がいらっしゃると思うので、やはりこれから経済の状況は厳しくなりますので、そういうところで協力していただいて、またそういった方には何らかの評価をしてあげることが必要じゃないかなと思います。

施設関係につきましては、大学はPFIとかそういったような方式を導入しているんな工夫をしているようなわけで、多分そういったことをお考えとは思いますが、施設がよくなっていくことを期待しております。

## 委員からの意見

【委員長】 一通り委員の方々からのご意見を受けまして、高専の方からお答えいただいたわけですが、そのほかに委員の方でどうしても言い足りないことがあるという方はいらっしゃるでしょうか。

【吉原委員】 済みません、1つだけ。

一般教育のところでも国文学を廃止されましたよね。もうそれは決まったことは決まったことで、メリット、デメリットあるわけですからそれをどうこうということではなく、私の意見を少しだけ述べさせていただきます。よくこのごろ気象庁は、災害を例えば、「ゆく川の流れは絶えずして」という鴨長明の歌のように文学的な表現に例えますよね。

ところが、よく災害とか建設関係のことを文学的な角度から見ますと結構奥が深かったり、マスコミさんがよく「観測史上初の」というのは言われますけれども、気象は観測し出してせいぜい100年なんですよね。それ以前のなかった時代にどうしたかと、災害をどういうふうにして耐えてきたかとか、文学の中で違う角度から見ると、技術的に学ぶべきものが結構あるんですね。

そういった面で国文学も結構角度を変えてみると、「五重塔」、その他にしても、そういうふうには国文学の中にも至る所にたくさん出てくるんですよ。だから、角度を変えてそういうふうには物の見方を一般教養の中であるというのも、災害に対して、現代を生きる者に対して結構教訓になるものがあるということを私は感じました。

【委員長】 ありがとうございます。

一般教養といいますか、その辺を考えてもらいたいというご意見が結構ございましたけれども、そういった一つのご意見であると思います。

ほかはよろしいでしょうか。

【迫田委員】 私から1つ。せっかく有限会社「隼人テクノ」もできて、我々も一生懸命応援しようという立場でございます。

倉狩部長さんもさっき施設整備で、独法化されて高専機構からの予算も厳しいというお話でございますけれども、こちらに入ってくる時にワシントン椰子を見ましたら、試験的に枝刈りしたものしかないんですね。やっぱり会社ですから少し委託費なり事務費をいただかないとやれないと思うんですけども、ぜひ、やはりここが発信基地ですから、いや3月にやるんだよということなのかもしれませんけれども、ぜひ事業費を獲得して、「隼人テクノ」に作業を委託していただくようお願いをしたいと思います。

### 閉会のあいさつ

【委員長】 ほかはよろしいでしょうか。

それでは、随分時間がオーバーしましたけれども、以上でこの外部評価委員会を終わりたいと思います。

この外部評価委員会の規則第6条ですけれども、外部評価を行ったときは報告書を作成してそれを公表するという事になっております。作成は学校側で行っていただきまして、委員長の方で確認するという事にさせていただきたいと思っておりますけれども、それでよろしいでしょうか。

【委員長】 ありがとうございます。

高専の方で主体性のある計画といいますが、それを立てていただく中でこういった外部評価の意見を取り入れてもらえばいいんじゃないかと思っております。委員の方も高専のいろんな実態をすべて把握しているわけじゃありませんので、必ずしも全部取り込むということではなくて、それで結構だと思います。

ただ、困難なのは避けるということではございませんけれども、そういったところはぜひ高専の方で、高専の主体的なこれからの計画を立てていく中で生かしてもらえたらいいんじゃないかと思っております。

それでは、これをもちまして平成17年度の鹿児島工業高等専門学校の外部評価委員会を閉会といたします。

引き続きまして、磯田庶務課長の方から説明があるということですので、しばらくお待ちください。

【庶務課長】 委員の皆様におかれましては、長時間本当にありがとうございました。最後に、校長から

挨拶を申し上げます。

前田校長、よろしく申し上げます。

【校長】 本日は、本当にそれぞれお忙しい中、時間をつくって鹿児島高専まで足を運んでいただきまして、ありがとうございました。

そして、本当にいろんな非常に具体的なお指摘をいただきました。高専はいろんなところから今、評価を受ける制度になっています。文部科学省、それから大学評価・学位授与機構からの評価、それからJABEEからの評価とありますが、そういう評価に比べまして、今日の外部評価委員会の委員の先生方の非常に具体的な、本当にすぐにも実行すべきことをご指摘いただきました。

前回ご指摘いただいたことも非常に学校にとって大変有意義なことがございまして、取り組みさせていただきましてけれども、きょうご指摘、ご提案いただきましたこともしっかり受けとめまして、鹿児島高専の学生のために、そしてまたそれが地域社会のためになるように邁進していきたいと思っております。どうも本日は、ありがとうございました。

【庶務課長】 これを持ちまして、本日の会議を全て終了いたします。

ありがとうございました。

## 6. 外部評価委員からの提言に対する本校の今後の対応等

### ご意見・提言等

		委員からの評価及び提言	提言に対する現状分析	提言に対する今後の対応又は意見
1	時間軸	教育改善までに時間がかかりすぎているのではないかと。企業では、年度末に立てた計画の評価はその年度には結果を出し、翌年度の計画を立てている。	教育等の成果が現れるためには時間がかかるが、組織が小さいせいもあるが、大学よりはかなり短い時間で成果を出していると自負している。	高専機構の中期計画では、5年計画で目標を立てているが、なるべく時間軸をきちっとして、短い時間で成果を上げるよう努力したい。
2	特命統括官の名称	特命統括官という職名はイメージが堅いため、名称変更してはどうか。	特命統括官にはFD担当、留学生担当、JABEE担当、ロボコン担当の4部門があり、校長直属の組織であることから非常に能率的で短期間に実効が上がっている。	名称に関しては、変更する方向で検討する。
3	高専の特色	鹿児島高専を卒業したら、この技術だけは修得できるというような、特色や特化した技術を学生に修得させていただきたい。	特命統括官（ロボコン担当）を発令し、校内の協体制度を整備したことにより、ロボコンで全国大会に出場できるようになった。	他高専で実施していないことや学生のためになることをこれからも真剣に考えていきたい。
4	教員交流	一般教養に力を入れて欲しい。おもしろい教員をそろえたらどうか。また、高専間の交流、大学の教員との交流を活発にしてはどうか。	高専間の教員交流に関しては、平成18年度に本校の教員が他高専に1年間転出する。また、他の高専から2年間受け入れる。	これからも一般教養科目の充実には配慮していきたい。教員の採用に関しては、教育力のある教員を採用していきたい。 高専間の人事異動に関しては、高専間の教員交流を契機に活発になっていくのではないかと。
5	資料の簡潔化	外部評価委員会資料が多すぎる。目標に対する今後の課題や改善点を簡潔にまとめた資料を作成していただきたい。	3年間の主な取り組みについては、厳選した内容を資料にした。	企業の考え方も取り入れながら目標を明確にしてこれから取り組んでいきたい。 また、次回の外部評価委員会では、より簡潔にした資料で報告したい。
6	教育	教育には、時間がかかるが、改善には迅速な対応を心がけていただきたい。	教育改善のシステムができてきているので、必要な時間軸で改善を行っている。	教育内容によっては、短い時間で成果を上げるよう努力したい。
7	一般教養科目	法律や経済等の科目が選択科目となっているが、高専は大学的側面もあることから、一般教養科目をもう少し充実してはどうか。	高専は、専門知識、技術力は優れているが、英語力と一般教養が弱いと言われている。現在、社会的な倫理観、グローバルな考え方や、コミュニケーション能力を養成するために、力を入れている	本科で一般教養科目を充実させることはカリキュラム構成上難しい面もあるが、専攻科のカリキュラムと連動しながら検討していく。
8	一般教養科目	中国語、韓国語を低学年のカリキュラムに導入してはどうか。	中国語、韓国語は新教育課程で4年と5年次に選択で履修させるようにしている。	語学は、若いうちに学習するというのが基本であるが、低学年において韓国語、中国語を開講することは、教育課程上および時間割編成上無理がある。

		委員からの評価及び提言	提言に対する現状分析	提言に対する今後の対応又は意見
9	一般教養科目	中国語等について、4年次のカリキュラムに取り入れられたが、同好会でも構わないので早い段階で取り組んでいただきたい。	- -	自主的な同好会形式であれば可能である。
10	一般教養科目	技術者を育成することは、技術面だけの教授でなく、国文学に学ぶものも多いため、一般教養科目の充実を図っていただきたい。	技術者教育のため一般科目と専門科目が学年進行と共に、バランスよく配置している。	高専の卒業生は一般的に一般科目に弱いといわれている。今後一般教養科目の教育内容等について検討していきたい。学園生活の中で、図書館の活用を推進し、余暇の時間を使って読書をするように働きかけたい。
11	専門科目	風土学、感性工学に関する授業を設けてはどうか。	- -	土木工学科に関係が深い科目であるが、土木専門科目のバランス上難しい。
12	インターンシップ	インターンシップの派遣先の確保では、錦江湾テクノパーククラブへの依頼、また、九州経済産業局を利用してはどうか。	錦江湾テクノパーククラブへの依頼は行っている。 行政では地域ごとに対応するようになっており、鹿児島県のインターンシップ事業で適当なものは活用している。	企業、研究所等へ個別に依頼して、今後も引き続き、派遣先確保に努めていきたい。
13	ティーチング・アシスタント	実験・実習にティーチング・アシスタント制度を採用してはどうか。	専攻生を大学院生のようにティーチング・アシスタントとすることは、規定上できない。 技術室を設け、技術職員が実験・実習などの技術教育支援を行っている。	研究室において卒業研究生を指導する等のことは行われているので、こういった形で専攻科生の力を利用していきたい。
14	スポーツへの取り組み	高専の場合、3年生も冬場のスポーツに参加できるので、冬場のスポーツに力を入れて結果を出して、PRを行ってはどうか。	技術者教育のみならず、課外活動にも力を入れており、全学生の7割位は何らかのクラブ活動を行っている。	冬場に3年生が高校の試合に出られるので、チャンスを見逃さないよう積極的に参加させたい。また、クラブ顧問に伝えたい。
15	法人化後の取り組み	法人化に伴い学生が学校で合宿ができなくなったとのこと。各種法令との絡みがあって難しいと思うが、何らかの方策をとっていただきたい。	平成18年3月に学生寮1階の多目的ホールを利用して合宿を行った。	寮室の利用も考えて、安全面に配慮して方策を検討していきたい。
16	寮生活	今後の学生確保を考慮した場合、1年生の全寮制は改めてはどうか。	特別な理由があれば、1年生も自宅通学を認めている。	これまで以上に、安全な寮生活を送られるよう配慮すると共に、1年生の全寮制については、柔軟に対応していきたい。
17	研究	研究面でのコンセンサスを獲得よう努力をしていたいただきたい。また、高専の特色が出るような研究を行っていただきたい。	研究のコンセンサスが全く得られていないということはない。教育現場では、研究と教育のバランスが大切である。	研究水準は当然高めなければならないが、中小零細企業の相談などに対応できる敷居の低い研究機関でありたい。

		委員からの評価及び提言	提言に対する現状分析	提言に対する今後の対応又は意見
18	共同研究の促進	共同研究を増やし、その中で専攻科生を活用することで効果が上がって行くのではないか。	同研究の総数は多いとはいえないが、多くの部分で専攻科生もいっしょに取り組んでいる。	共同研究を増やすことがまず必要である。専攻科生の特別研究が共同研究につながるよう、特別研究の内容を企業等へアピールする場や企業技術者と専攻科生との交流などの場を設けることを検討していきたい。
19	産学官連携	地域や地域の企業と連携して、教育・研究を推進していただきたい。	1つの成果としては、高専発ベンチャー企業の「隼人テクノ」を設立した。 平成17年度は、「研究シーズ集」を作成し、地元企業、公的機関の約320社に送付した。平成17年度の第4回錦江湾テクノパーククラブ例会において、本校研究室のラボツアーを計画している。 また、経済産業省の若手人材育成のための調査事業として、県内・県外約2,000社、卒業生・OBの方約1,000名に人材育成に必要なニーズ等のアンケートを送付した。	今後も、地域や地域の企業との連携を深めるように、教育・研究を推進していきたい。 具体的には、錦江湾テクノパーククラブとの連携、高専発ベンチャー企業「隼人テクノ」の活用及び経済産業省の地元中小企業の若手人材育成事業への取り組み等を通して推進していく。
20	鹿児島TLOの活用	地域共同テクノセンターで、さまざまなPRを行っているが、鹿児島TLOをもっと活用していただきたい。	これまでにいくつかの特許等の申請が行われているが、鹿児島TLOの活用はまだない。	平成18年度より鹿児島TLOが錦江湾テクノパーククラブの特別会員となったこともあり、今後活用を進めていきたい。
21	学校PR	高専制度や5年、7年間の一貫教育のメリットをPRしてはどうか。	中学校訪問では、中学生及びその指導教員に高専制度を説明している。また、エジソン型人材育成による技術力向上が特徴であることも説明している。	中学校訪問時等に、なお一層、一貫教育のメリットを詳しく、具体的に説明していきたい。
22	学校PR	高専の認知度を一般社会に高めるため、広報活動の充実を図ってはどうか。	高専機構を含めた高専全体で、広報委員会を設置し、広報活動に努めている。 鹿児島高専では、教員が県内すべての中学校に出向き学校紹介を実施している。また、中学3年を対象とした一日体験入学実施している。	鹿児島高専の知名度を高めるための広報活動を一層充実させていく。
23	学校PR	土木工学科の名称を持つ高専が全国に鹿児島高専だけということであれば、近隣の中学校にPRしてはどうか。	- -	近くの県から確実に足固めをすべきだということで、その方向で検討したい。

		委員からの評価及び提言	提言に対する現状分析	提言に対する今後の対応又は意見
24	学校PR	高専のPRのために記者クラブを活用してはどうか。 また、マスコミ各社に高専の説明会を開催してはどうか。	高専機構としても、入学者確保の面からPRを進めている。	本校も、記者クラブを活用した高専のPRに取り組みたい。 また、マスコミ各社を対象とした学校説明会を検討したい。
25	受託試験等	土木工学科の受託試験及び共同研究等の外部収入については、収入の一部を高専全体で活用できるシステムを構築してはどうか。	- -	基本的に本校の収入とし、その資金は学校全体で運用できるシステムを構築していきたい。
26	セクシュアル・ハラスメント防止・対策委員会	セクシュアル・ハラスメント防止・対策委員会の具体的な体制について、また、外部の専門家が委員として加わっているのか伺いたい。	防止対策委員会の中に調停委員会、調査委員会を設けている。 セクハラ相談は、看護師を含め、各学科に相談員を設け対応している。	顧問弁護士等の委員委嘱については検討していく。 また、セクハラを未然に防ぐための教職員、学生への啓蒙活動も行う。
27	施設整備	施設老朽化の改善の取り組みについて伺いたい。	教室の狭隘化解消の工事が独法化に伴い、第一期工事で終わっている。	校舎改修工事等は予算的に難しい面もあるが、校長を中心に検討を進めていきたい。
28	施設整備	校内のワシントン椰子は試験的に刈り取られているだけであることから、「隼人テクノ」に委託してはどうか。		(有)隼人テクノから見積書等を提出していただき、検討したい。



外部評価委員会

# 鹿児島工業高等専門学校の概要

ホームページ <http://www.kagoshima-ct.ac.jp>



## 本校の学習・教育目標

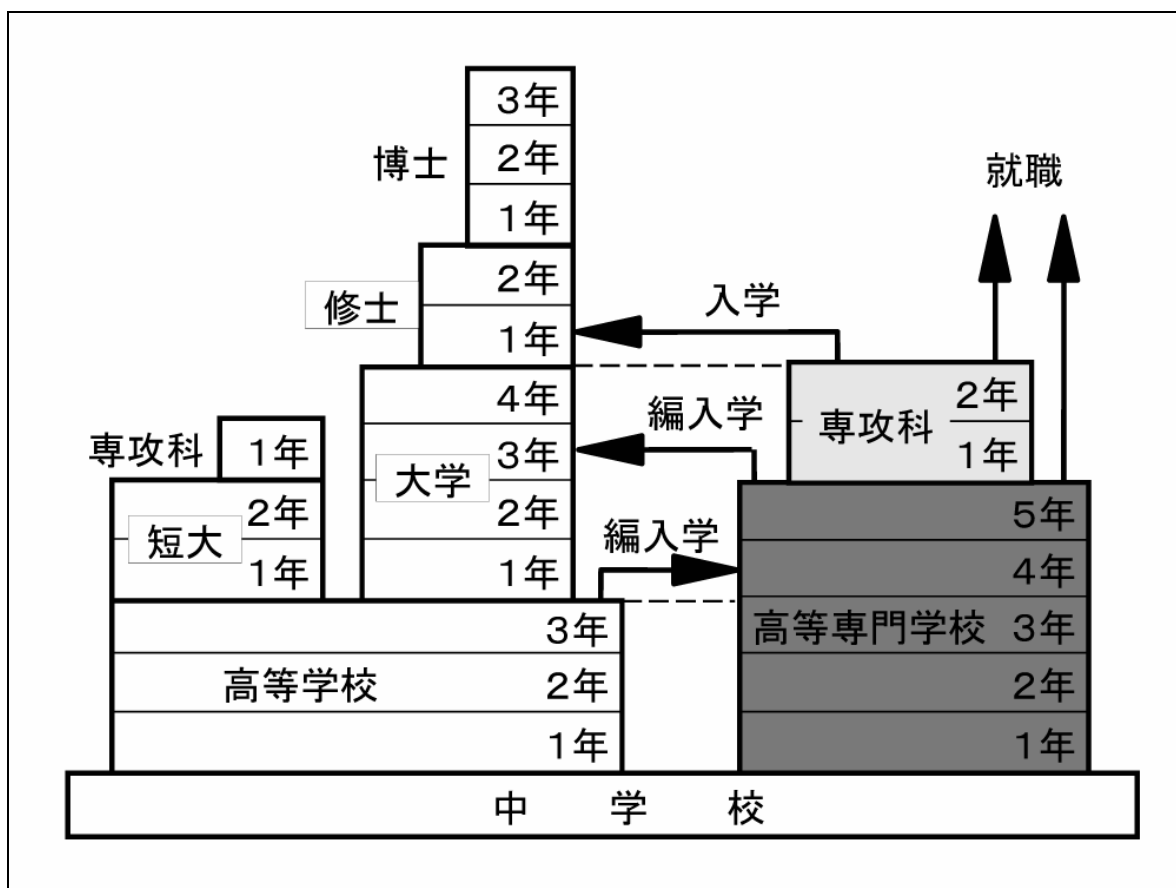
養成すべき人材像として以下の学習・教育目標を掲げている。

- I. 人類の未来と自然との共存をデザインする技術者となること。
- II. グローバルに活躍する技術者となること。
- III. 創造力豊かな開発型技術者となること。
- IV. 相手の立場に立ってものを考える技術者となること。

## 入学者の受け入れ方針(アドミッションポリシー)

本校の学習・教育目標に共感し、この目標達成にふさわしい素質と能力のある人を受け入れます。特に次のような人を求めています。

- 1) 論理的な思考ができる人
- 2) もの作りが好きな人
- 3) プレゼンテーション能力のある人
- 4) 21世紀の世界を支える技術者として、大いに活躍したいという夢のある人



## 高専とは

### <高等教育機関の種類>

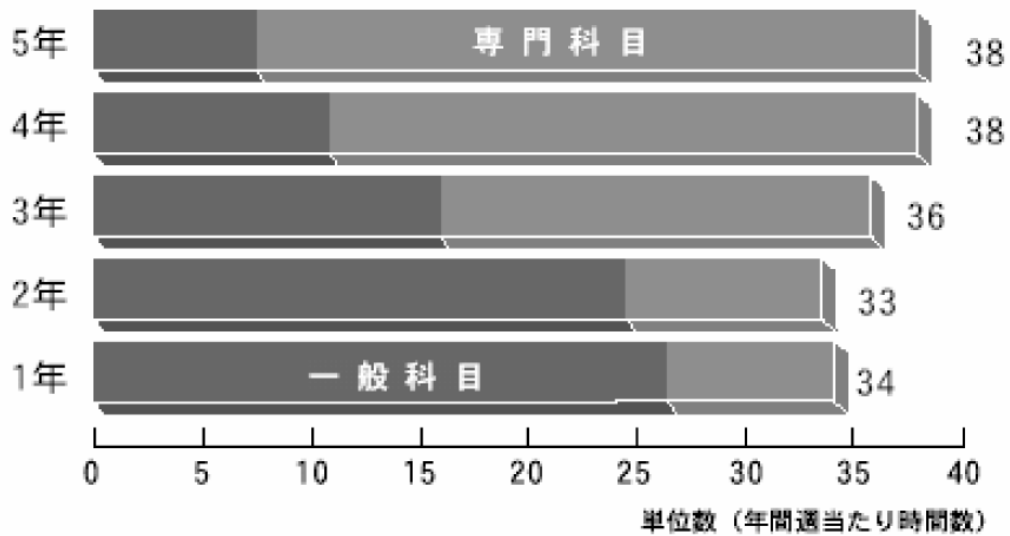
短大(高卒後2年)	→ 準学士
大学( " 4年)	→ 学士
高専(中卒後5年)	→ 準学士
高専(専攻科2年)	→ 学士

### <全国の高等専門学校>

国立 → 法人化

独立行政法人(工業系)	50校
独立行政法人(商船系)	5校
公立(工業系)	5校
私立( " )	3校
合計	63校

## 5年間一貫教育



	学科名及び専攻名	入学定員	在籍学生数(女子)
本科	機 械 工学科	40名	208名(4名)
	電気電子 工学科	40名	203名(18名)
	電子制御 工学科	40名	213名(25名)
	情 報 工学科	40名	209名(56名)
	土 木 工学科	40名	201名(15名)
	入学定員合計	200名	在籍者合計 1034名(118名)
専攻科	機械・電子システム工学専攻	8名	25名
	電気情報システム工学専攻	8名	19名(2名)
	土木工学専攻	4名	15名
	入学定員合計	20名	在籍者合計 59名(2名)

## 入学試験（募集要項・入学案内）

### <学力試験>p1

- ・試験科目は従来どおり、5科目（英語、数学、国語、理科、社会）各50分づつ
- ・配点は 数学200点、他教科100点の計600点満点

### <推薦入試>p3

- ・推薦枠は30%程度
- ・推薦基準：
  - (1) 3年次の1学期および2学期の席次の平均が当該学年全体の上位10%以内に属する者
  - (2) 上位15%以内（生徒会長経験者、部活動等で優秀な成績を修めた者）
- ・作文：50分、字数800字以内
- 面接：10分程度
- 工学適性検査：数学的適性検査、30分程度の筆記

## 入試統計(H17.3)

学科名	志願倍率	入学者平均点
機 械 工学科	2.5倍	407.6
電気電子 工学科	2.1倍	400.8
電子制御 工学科	2.1倍	408.0
情 報 工学科	1.9倍	422.6
土 木 工学科	0.9倍	367.6
平 均	1.9倍	401.3

## 入学時諸経費(予定)

①入学料	84,600円
②前期授業料(半年分)	117,300円
③教科書、実習服代他	約 80,000円
④制服代(女子のみ)	43,000円
⑤寮費(食費他、月額)	約 30,000円
合計	311,900円 (女子354,900円)

授業料免除(H16年度)199名(18%)  
(全額免除115、半額免除 84)

奨学生 (H17年度)227名(22%)  
日本学生支援機構159、県育英財団46、市町村奨学金等22  
(貸与月額 10,000~50,000円)

## 卒業後の進路(H17.3卒)

卒業生数 204名

就職者数 105名(51%)  
求人倍率 :10.2倍

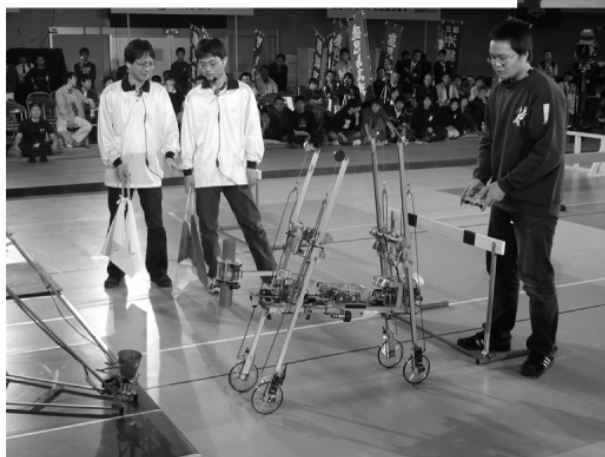
進学者数 83名(41%)  
主な進学先:  
国立大学工学部(3年次編入)  
高専専攻科

自営その他 16名(8%)

大学・高専専攻科進学先(H17.3卒)

鹿児島高専(専攻科)	37名
鹿児島大学	7名
九州工業大学	8名
豊橋技術科学大学	12名
長岡技術科学大学	6名
九州大学	2名
熊本大学	6名
香川大学	1名
島根大学	1名
佐賀大学	1名
志学館大学	1名

2005年NHKロボコン  
九州・沖縄地区大会優勝



全国大会ベスト4  
技術賞受賞





寮生数 平成16年4月現在

学年	1年	2年	3年	4年	5年	専攻科	計
男	194	97	99	60	54	1	505
女	14	14	10	5	0	0	43

日 課	日課時間表
起 床	7:00
点呼・体操	7:00~7:20
清 掃	7:20~7:40
朝 食	7:20~8:30
登校閉寮	8:30
昼 食	12:20~13:10
開 寮	授業終了時
入 浴	16:30~19:50
夕 食	17:30~19:00
点 呼	19:55
自 習	20:00~23:00 (21:20~22:00は休憩を含めた行為も可)
点 呼	23:00
消 灯	24:00

## 産学官連携・地域連携等関連の実績

1. 共同研究・受託研究: 9件、980万円
2. 受託試験(コンクリート圧縮試験、金属材料引張試験)  
約1,500件、約2,300万円
3. 奨学寄付金: 15件、約420万円(以上平成16年度)
4. 技術相談: 約50件、製品性能試験について等
5. 公開講座、フォーラム等など、年数件
6. 「鹿児島高専産学官連携推進室」  
(鹿児島市営「ソフトプラザかごしま」内)
7. 産学官交流組織「錦江湾テクノパーククラブ」
8. 高専発ベンチャー企業「(有)隼人テクノ」の設立
9. 隼人錦江スポーツクラブ
10. 隼人町教育委員会と連携協力協定の締結



K T C

錦江湾テクノパーククラブ  
Kinko-wan Technopark Club

産・学・官が連携を密にして、  
地域産業の振興と発展に寄与する

設立：平成10年3月

内容：鹿児島県国分・隼人テクノポリスを中心とする南九州地域有志企業が、鹿児島高専を中核として設立した産学官交流組織

理念：地域との連携強化。地域企業の技術向上や鹿児島高専との積極的な産学連携の推進。

窓口：鹿児島高専地域共同テクノセンター

会員：一般会員（企業）50社、特別会員15社（公的機関、鹿児島県商工観光労働部、鹿児島県工業技術センター、かごしま産業支援センター、鹿児島市、国分市、隼人町等）

活動：年に4回の例会、技術講習会、交流会、講演会、産学共同の研究、受託研究、技術相談等

御清聴ありがとうございました。  
外部評価委員会に  
参加していただきあり  
がありがとうございました。

